

長野県飯山市旭町遺跡群

鍛 冶 田

1980. 6

飯山市教育委員会

長野県飯山市旭町遺跡群

鍛 冶 田

1980. 6

飯山市教育委員会

序

北信土地改良事務所によって県営圃場整備が実施されている旭町地区は、昨年度の2000m²に及ぶ発掘によって、平安時代中期ごろといわれる鍛冶場跡と推定される貴重な遺跡が発見された。

この発見によって、旭町地籍周辺には更にこれに関連する遺跡が存在するのではないかと関係者の注目を集めたところである。

今年度は、昨年度に引き続き飯山北高等学校高橋桂教諭に調査団長の労を煩わし、県営圃場整備の実施に先立ち、北信土地改良事務所の委託事業、国及び県の補助事業として緊急発掘調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることとした。

雪国の早春はまだ寒風が吹く中1ヶ月間、高橋団長はじめ調査員各位並びに作業員の皆様方の献身的な努力によって土壌墓をはじめ当地方の古代生活を知るうえで貴重な資料が出土し、飯山地方の古代の未知分野に新たな1ページが加えられることとなったことは、誠によろびにたえないところである。

この緊急発掘調査に協力して下さった北信土地改良事務所及び地元実行委員会や多くの方々の御厚意に対し、心から感謝を申し上げますと共に、団長高橋桂先生の御指導により、立派な報告書が出来たことに対し御礼を申し上げます次第であります。

この報告書が郷土の歴史の解明と明日の生活の糧として活用されることを念願するものであります。

昭和55年3月10日

飯山市教育委員会

教育長 田 中 清市郎

例 言

- 1 本書は、県営圃場整備事業に伴う、飯山市旭町遺跡群鍛冶田遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、飯山市教育委員会が調査主体者となり、昭和54年4月23日～6月10日にかけて行なった。
- 3 発掘調査から整理にかけては、以下の諸氏から御参加、御助言をいただいた。記して感謝申し上げます。
広瀬昭弘、黒岩鉄人、西沢隆治
- 4 調査の整理、作図は太田文雄、今井正文、松沢伸一、望月静雄が行ない、青木由美子、徳竹雅之、荒井宏3君が協力した。
- 5 本書の執筆は、高橋桂団長以下太田文雄、松沢伸一、青木由美子、望月静雄が分担して執筆し、文末に記した。
- 6 本書の編集は高橋桂、太田文雄、望月静雄が行なった。

目 次

序文

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	2
1. 遺跡の位置	2
2. 周辺の遺跡	2
III 調査経過	5
IV A地区	7
1. 概 要	7
2. 土墳墓	10
3. 井戸址	12
4. 遺 物	15
V B地区	17
1. 概 要	17
2. 井戸址	17
VI C地区・D地区	20
1. 概 要	20
2. 弥生時代の遺構と遺物	20
3. 平安時代、中世の遺構と遺物	32
VII まとめ	36

I 調査に至る経緯

旭町県営水田圃場整備事業は、昭和48年から10ヶ年計画で工事面積138ha、総工費9億3千万円で実施されてきた。

昭和54年度には37.5haの面積を施行する計画となっていたが、この予定区域は飯山盆地の一部をなし、かつて湿地帯であったところが定住区域として生成されてきたところであり、盆地の西端に位置するがため山麓は南南東にほど良い傾斜を持ち、景観にも恵まれ、古代においても人類の活動には好適ではなかったかと推定される場所である。

事実、斜面の水田化していないアスパラ畑には土器（土師器後期）が出土しており、昨年の緊急発掘により出土した北原遺跡の鍛冶炉址にも約800m程の距離で近いこと等から総合判断して平安時代の集落址及び生産址が存在するのではないかと推測されていた。

このため、圃場整備の施行に先立ち、53年9月28日に現地において、県文化課、北信土地改良事務所、市教委の三者による保護協議を行ない、上記認識の確認にたち畑地を主体に緊急発掘を昭和54年度において行ない記録保存を図ることとした。

昭和53年10月25日、市教育委員会に対し、県教育委員会より当発掘調査の受託依頼があり、面積1000m²以上500万円の調査費用と計画が提示された。

1月10日、県教育事務所に対し農家負担分の文化財補助事業計画書を提出。3月23日埋蔵文化財発掘通知を県教育委員会へ提出。

4月4日、北信土地改良事務所より調査の協力依頼がある。

4月7日、調査委託契約を結び、4月16日より資材搬入、18日テント設営。

4月20日調査体制を整えるため、旭町遺跡群鍛冶田遺跡調査会及び調査団を結成し、高橋桂飯山北高等学校教諭を団長とする調査団が発足。

4月23日、現地のアスパラ畑において調査会、調査団によって鍬入式が挙行され、古代文化の解明にメスを入れたのであった。

(飯山市教育委員会社会教育係長 佐藤正俊)

Ⅱ 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

旭町遺跡群鍛冶田遺跡は、飯山市大字旭字鍛冶田地籍等に所在する（第1図）。

千曲川が信濃に残す最後の平坦地が飯山盆地である。平地は中央を流れる千曲川によって二分され、東側は木島平と呼称される。西側は南北に走る長峰丘陵によってさらに二分され、東側を常盤平、西側は外様平と呼称されている。

外様平は信越を分かつ関田山脈と長峰丘陵に狭められた狭長な平地であるが、関田山脈より流出する小河川を集めた広井川によって肥沃な低湿地を形成している。

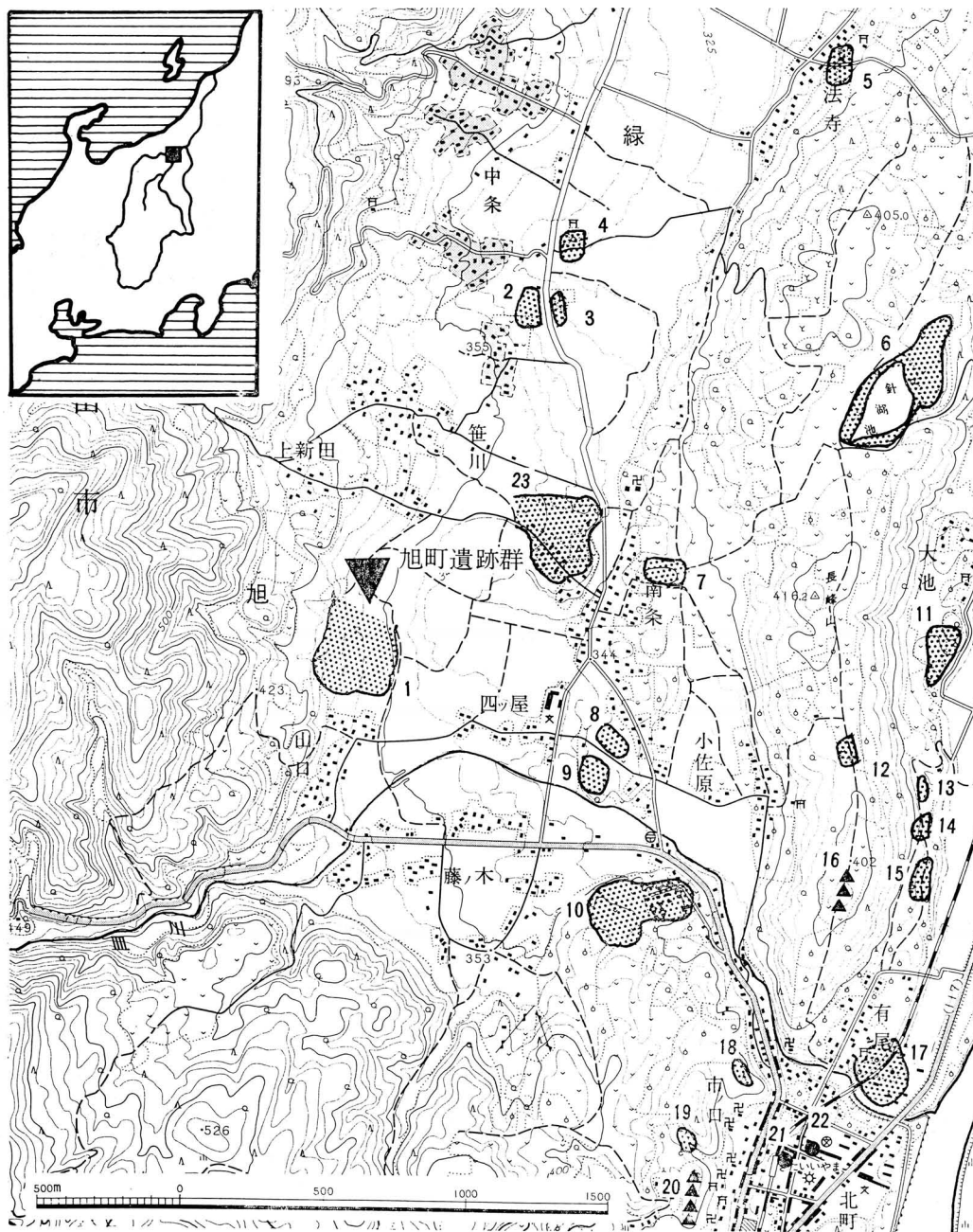
旭町遺跡群は、この外様平の南部に位置し、低湿地をとり囲む微高地、扇状地上に立地する。昭和53年に発掘調査され平安期鍛冶田遺跡群を検出した北原遺跡（高橋桂1979）も本遺跡に含まれる。鍛冶田遺跡は、北原遺跡の南西約800mの関田山脈麓に形成された扇状地上に立地する。この扇状地は、広井川の源の小河川によって形成されたのであるが、急傾斜で低湿地に接しており、大小様々な水田が階段状に並ぶ。遺跡の範囲は、扇状地の中央に深く刻まれた谷状地を中心としてかなり広範囲に及ぶものと思われるが、水田耕作のために地形の改変が著しく極めて不明瞭である。ただ、今までの所見に基づけば、本遺跡の南側は皿川の氾濫原であって、山麓も比較的急斜となっており遺物の分布も認められていない。したがって、第1図のように北へ拡がり、北東の北原遺跡まで半月状に分布する一大遺跡群となるものであろう。

2. 周辺遺跡

外様平南半における遺跡は、縄文草創期の城端遺跡（高橋桂 1970）、弥生後期の方形周溝墓を検出した須多峯遺跡（高橋桂 1966）等著名な遺跡が多い。さらに、長峰丘陵を中心として分布する弥生期の遺跡が多いのも特筆される。これは前項でも触れたように、広井川によって形成された肥沃な低湿地が生産の場とするのに好適であったためであろう。このことは、飯山地方における該期の遺跡の大半が外様平周辺に立地することからも首肯される。

弥生時代の次に本格的な開拓をもたらした時期は平安期頃と推定される。古墳時代初頭のいわゆる五領期に併行する柳町式土器が出土した須多峯遺跡（高橋・太田 1977）、桐原健氏が調査した鬼高期の有尾遺跡（長野県飯山南高校考古学クラブ 1961）を除けば、古墳から奈良時代にかけての遺跡は全く認められていない。これは当地方で全般的に見受けられる事象である。平安期に入って漸くその痕跡が認められるが、その中心となった地は北原遺跡とこの鍛冶田遺跡を中心とする旭町遺跡群と思われるのである。

（望月静雄）



第1図 鍛冶田遺跡の位置と周辺遺跡分布図（1：25000）

旭町遺跡群鍛冶田遺跡の位置と周辺遺跡分布図

- 1 鍛冶田 2 別府原 3 笹川 4 布施田神社 5 法寺 6 針尾池 7 鶴巻 8 鬼ヶ峯 9 城ヶ端 10 須多峯 11 お茶屋 12 長峰 13 長者窪 14 林子畑 15 黄金石上 16 有尾古墳群 17 有尾 18 ガニ沢上 19 大聖寺池 20 神明町裏古墳 21 北飯山 22 北町 23 北原（旭町遺跡群）



写真1 遺跡遠景（須多峯丘陵（南）より）

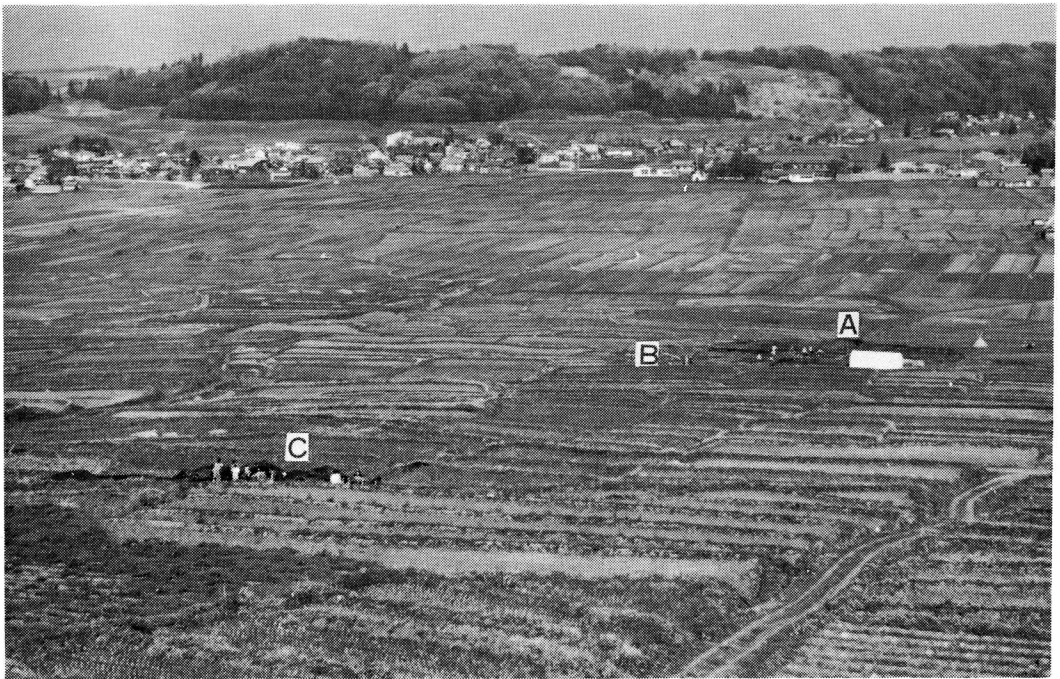


写真2 遺跡近景（西より）

Ⅲ 調査経過

発掘調査は4月23日から6月10日までの実働42日間にわたって行なった。

発掘に先立つ調査区の設定には、4月21、22日の両日にかけて行なった。方法は、地形改変が少なく遺物の散布が認められる二地区（A、B）を中心として、A地区の一隅に任意の基準点を打ち、両地区の区画に最も適応する方向で5m平方のグリットを設定した。また、その時の周辺踏査によって新に遺物の散布する地区を確認し、この地区をC地区と呼称し調査することにした。グリットは、A地区より延長して同一区画とした。

調査はA地区より着手した。C-10グリットより北へ掘り進めたが土師器数片が出土したのみで明確な遺構は検出されなかった。4月26日、H-8グリットで坏完形が出土した。また、ピット、土壌と思われる落ち込みが検出されたため、これらの分布範囲を明確に把握するため、A地区全面を発掘することにした。このための表土除去作業は5月13日までかかった。

一方、B地区は5月12日午後より開始した。弥生土器片等遺物は若干出土したが、明確な遺構は井戸址と思われる石組を一基検出したのみである。また、C地区へは5月3～6日の連休を利用して、高校生により表土を除去した。しかし、B、C地区はA地区の進捗状況に合わせ断続的に行ない、本格的には5月下旬から精査することになった。

5月中旬より、A地区を中心として遺構を掘り進めた。5月13日第2号土壌より土師器坏形土器が四個配置されて出土し、土壌墓ではないかと推測するに至った。また、5月16日には新に検出した第12号土壌より土師器坏形土器が一個伏せた状態で出土し、やはり土壌墓と考えられる事から、土壌群の広がりにも全力を挙げた。しかし、周辺の水田が削平されていることから範囲の把握は不可能であった。

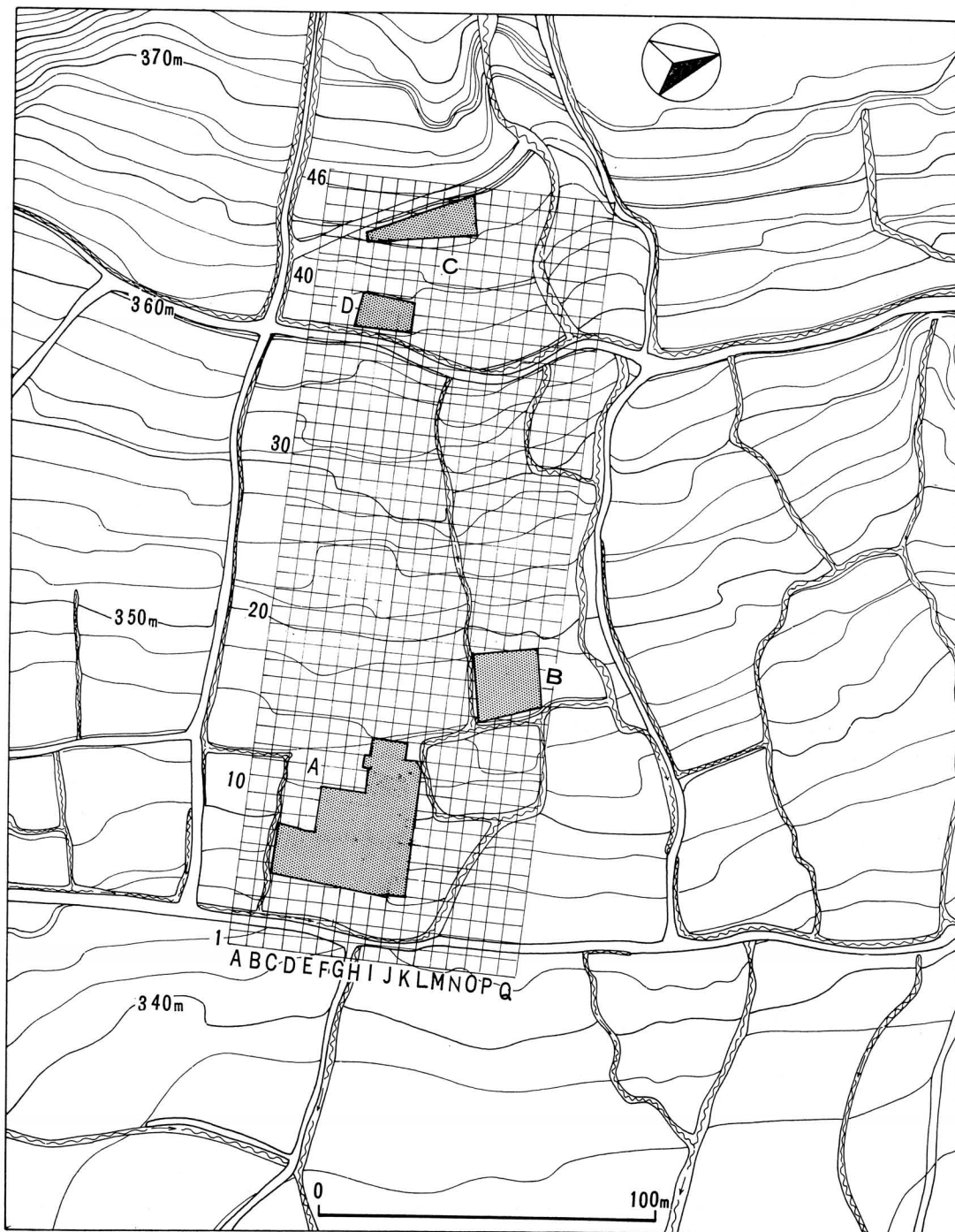
その他、G、H-11、12区を中心に井戸址が検出され、内部より木製品、内耳土器等出土した。

5月下旬に入って、A地区は実測作業を残すのみとなったので、主力をC地区に移動した。5月27日、C地区3号土壌より土師器坏形土器が五個配置されて出土した。そのうち三個体は重ねられていた。

また、C地区の僅か東方（下方）の道路建設工事が進められていた地点で、弥生土器が集中的に出土した。急拠この地点を工事関係者の協力を得て調査した。調査期限が5月31日のため、北信土地改良事務所に期限延長を申し入れ、6月10日までこの地点を中心に調査を進めようやく完了することができた。

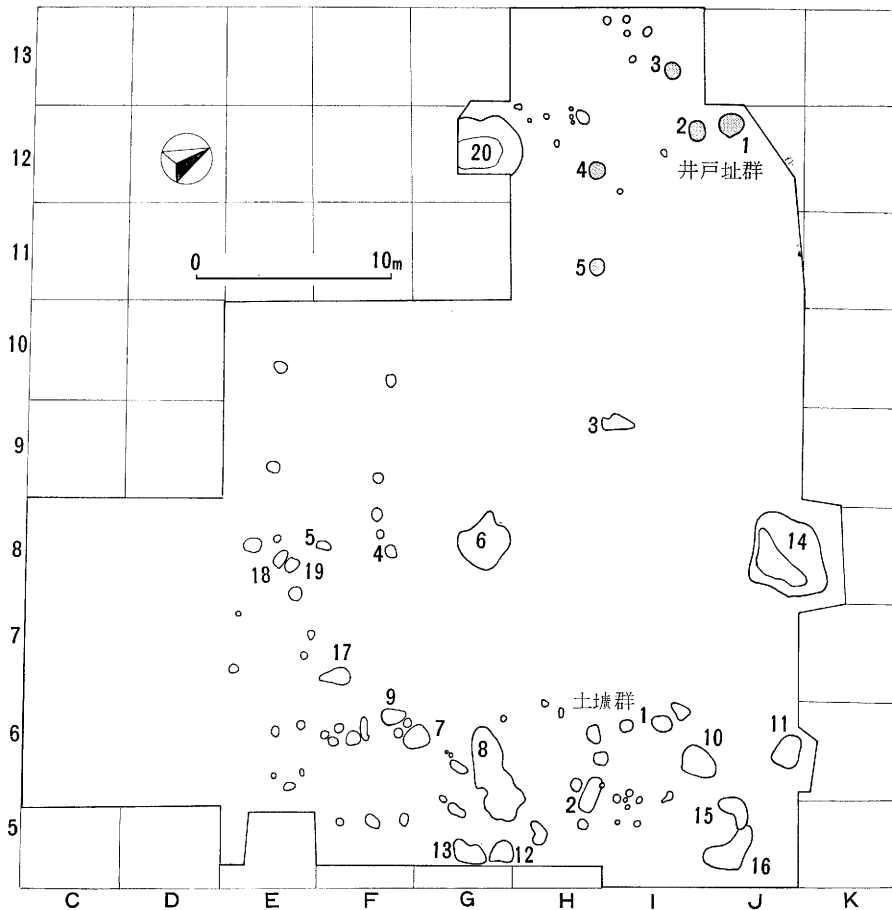
このように、今回の調査は遺跡範囲が漠然としており、さらに地形的制約が加わったため、3地区に分散して同時に完了するという極めて困難な調査であった。そのため遺跡全体を把握するには至らなかったが、総面積約1700m²を調査し、弥生時代、平安時代に比定される遺構、遺物を検出し得た。

（望月静雄）



第2図 遺跡周辺の地形図及び調査区

IV A 地区



第3図 A地区全体図

1. 概要

A地区は低温地に接する標高345m前後の傾斜地に位置し、対象地区のうち最も広い。

本地区は、近接するB地区とともに周辺では唯一の畑地である。古くから畑地として利用されていたためか、比較的攪乱は少なかった。

調査は5×5mのグリッドをセクション帯を残しながら掘り進めたが、黒色土の厚いところは70cmもあり加えて扇状地の故か小礫が多く含まれておりかなりの時間がかかった。検出された主な遺構は、土壙20基（環状土壙＝仮称＝2基含む）、井戸址5基である。この他、扇状地堆積物の礫が意識的に片づけられたと思われる礫群がE-7グリッド周辺に広がっていたが、本稿では省略する。

土壙としたうちの数基（2・3・13・14号土壙等）については、明らかに土壙墓と考えられるものである。このことについては次項で触れる。また、5・6号土壙等比較的小さな土壙が検出されてい



写真3 A地区全景(西より)



写真4 A地区調査風景

る。実測可能な遺物は出土しなかったが、何れも土師器で平安時代に比定されるもので、遺構もかなり明瞭なものである。環状土壙と仮称した遺構は14号と20号土壙である。14号はその全形を検出し得たが、20号土壙は拡張不可能のため全形は検出出来なかった。14号土壙は不整三角形とでも称す平面プランである。中央の黄褐色土層は当初貼り粘土と思われたが、調査を進めた結果、地山の土層であって遺構は環状に構築されている事が判明した。時期は出土遺物から弥生時代である。

井戸址は調査区内の最も北側の地点で検出された。何れも径1 m前後の円形乃至楕円形プランを呈するもので素掘りの井戸である。内部より木製品、内耳土器片が出土しており、中世に比定されよう。

以上、出土した遺構の概略を述べてきた。

A地区内では、住居址等生活の中心となる場所は検出し得なかった。また、周辺が概に水田耕作のために削平あるいは盛土されており、土壙等遺構の分布範囲を把握するに至らなかった。ただ、調査区内の分布状況から考えれば、ほぼ南側への限界を把握したものと思われる。土壙群については、東北側に広がるものと思われる。そして生活の場はさらに北側にあるものと推定される。

(望月静雄)



2. 土 壙 墓

第2号土壙 (写真5・6, 第4図)

H-6グリットに位置する。188×85cmの平面長方形プランを呈し、確認面からの深さ(以下、単に深さという)は35cmを測る。緩やかな傾斜地に構築されるが、長軸はほぼこの斜面に沿う。主軸はN-64°-Eをとる。壙底はほぼ平坦であるが、長軸の両端に深さ5cmの細長い溝が掘り込まれている。長軸の両袖には粘土状の黄褐色土が貼り付けられており、横断面は階段状を呈する。

この、いわゆる貼り粘土中に土師器坏形土器の完形品が4点並置されていた。壙底より20cmのレベル差を持つ。

第3号土壙 (写真7・第4図)

I-9グリットに位置する。175×75cmの平面不整長方形を呈し、深さは20cmを測る。長軸は傾斜面に対しほぼ直交する。

西壁の中央より土師器坏形土器完形品が1点検出されている。

第12号土壙 (第4図)

G-5グリットに位置し、13号土壙と並んで構築される。東側は削平されているため明らかでないが、130cm×120cmの楕円形プランを呈するものと思われる。深さは35cmで壙底は平坦である。覆土中には籾等含まれる。

第13号土壙 (写真8, 第4図)

G-5グリットに位置する。第12号土壙と同様に東側は削平されているため、全体のプランは明らかでない。壙底に接して土師器坏形土器が伏せた状態で1点出土している。坏周辺には拳大から人頭大の籾が出土している。 (望月静雄)

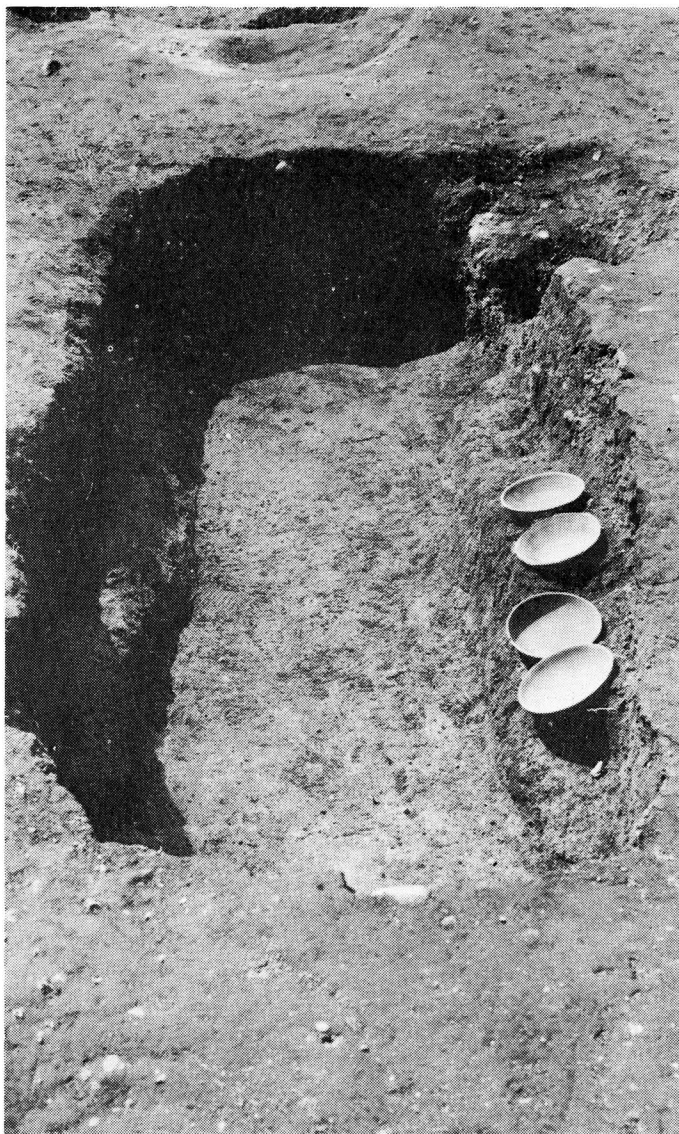


写真5 A地区第2号土壙 (東より)



写真6 A地区 第2号土壙 土師器坏形土器出土状態

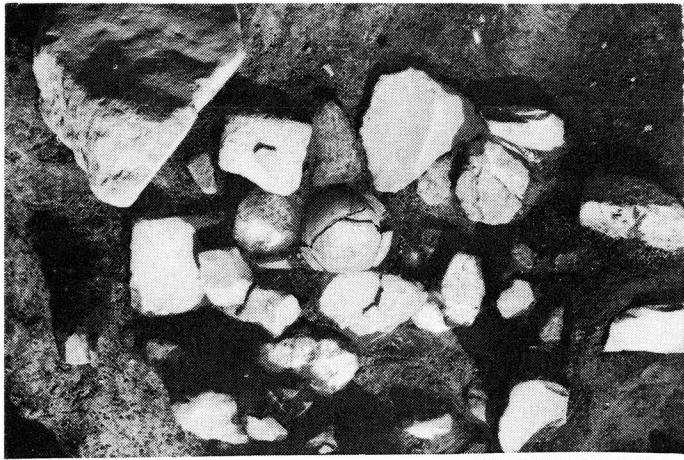


写真7

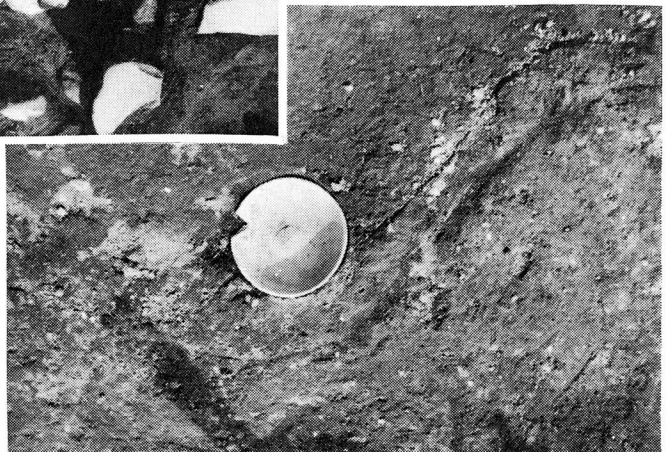
◀第3号土壙

土師器坏形土器出土状態

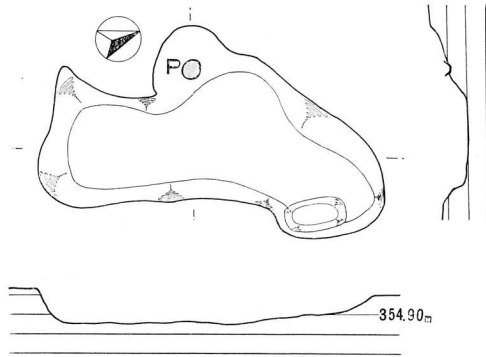
写真8

第13号土壙 ▶

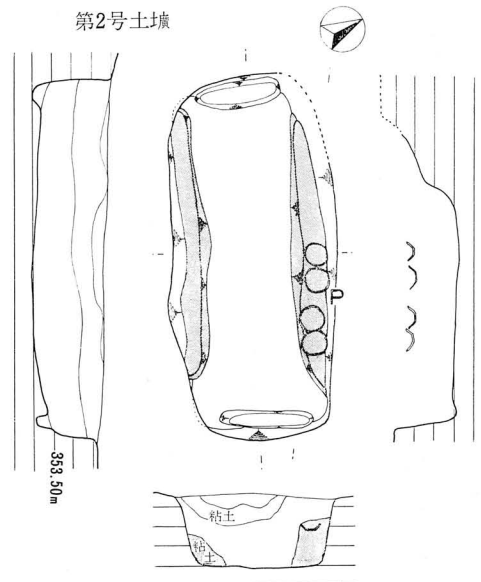
土師器坏形土器出土状態



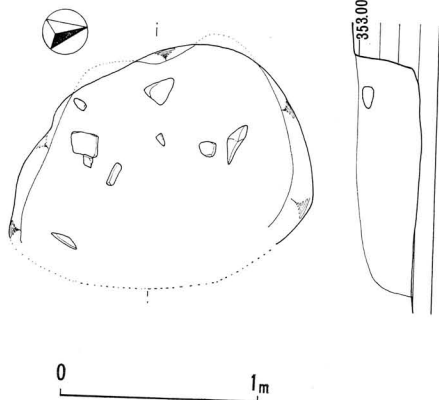
第3号土坑



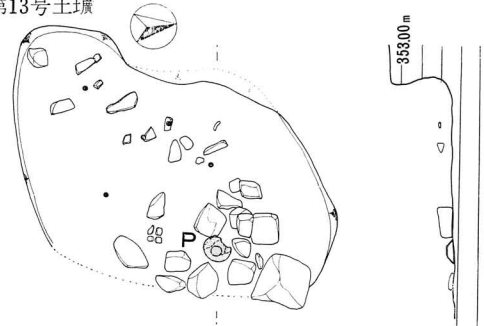
第2号土坑



第12号土坑



第13号土坑



第4図 A地区主要土坑実測図(2, 3, 12, 13号)

3. 井戸址

第1号井戸址 (写真9, 第5図)

J-12グリットに位置し、140×120cmのほぼ円形プランを呈し、深さは1段深い北側で、24cm、南側で11cmを測る。壁は緩やかであるが、北、西側はやや急である。

本井戸址内には、拳大から人頭大の石が詰まっており、廃棄された様相とも異なるため単に水をせき止める機能を持つものであろう。石の下には、一端が埋れる状態で長さ65cm、太さ5～7cmの樹木が一本検出された。

第2号井戸址 (写真10・11, 第5図)

I-12グリット、1号井戸址の南側に位置する。103×90cmの楕円形プランを呈し、深さ70cmを測る。壁面はほぼ垂直で、南壁上部には、地山の小児拳大の礫がある。

井戸内には、井戸底近くに、長さ10cmほどの木製品と炭化物が検出された。炭化物は、大きい方で長さ45cm、幅15～20cm、厚さ5cmほどになる。水が湧出している。



写真9 A地区 第1号井戸址



写真10 A地区 第2号井戸址 木製品出土状態

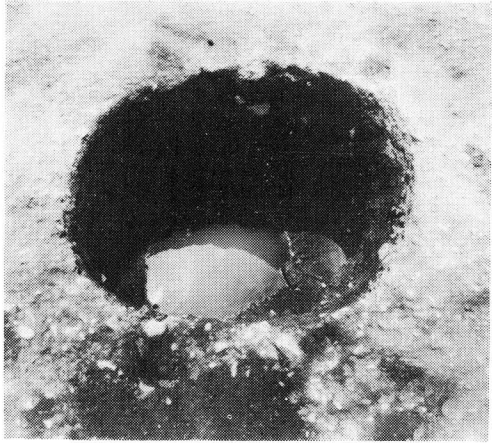


写真11 A地区 第2号井戸址

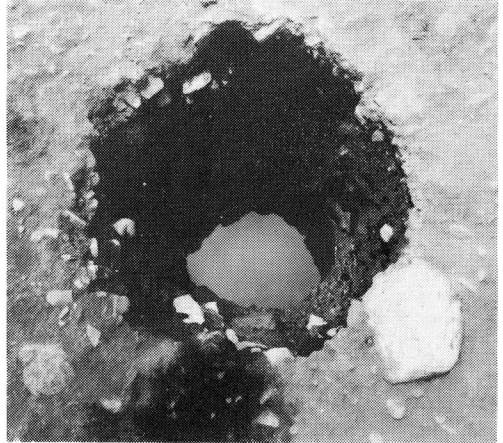


写真12 A地区 第3号井戸址



写真13 A地区 第4号井戸址



写真14 A地区 第5号井戸址

第3号井戸址 (写真12)

I-13グリットに位置する。90×82cmのほぼ円形のプランを呈し、深さ60cmを測る。壁面はほぼ垂直で、地山の礫がみられ、下部より水が湧出していた。

出土遺物はない。

第4号井戸址 (写真13, 第5図)

H-12グリットに位置する。90×84cmの不整形円形プランを呈し、深さは52cmを測る。壁はほぼ垂直である。水が湧出している。

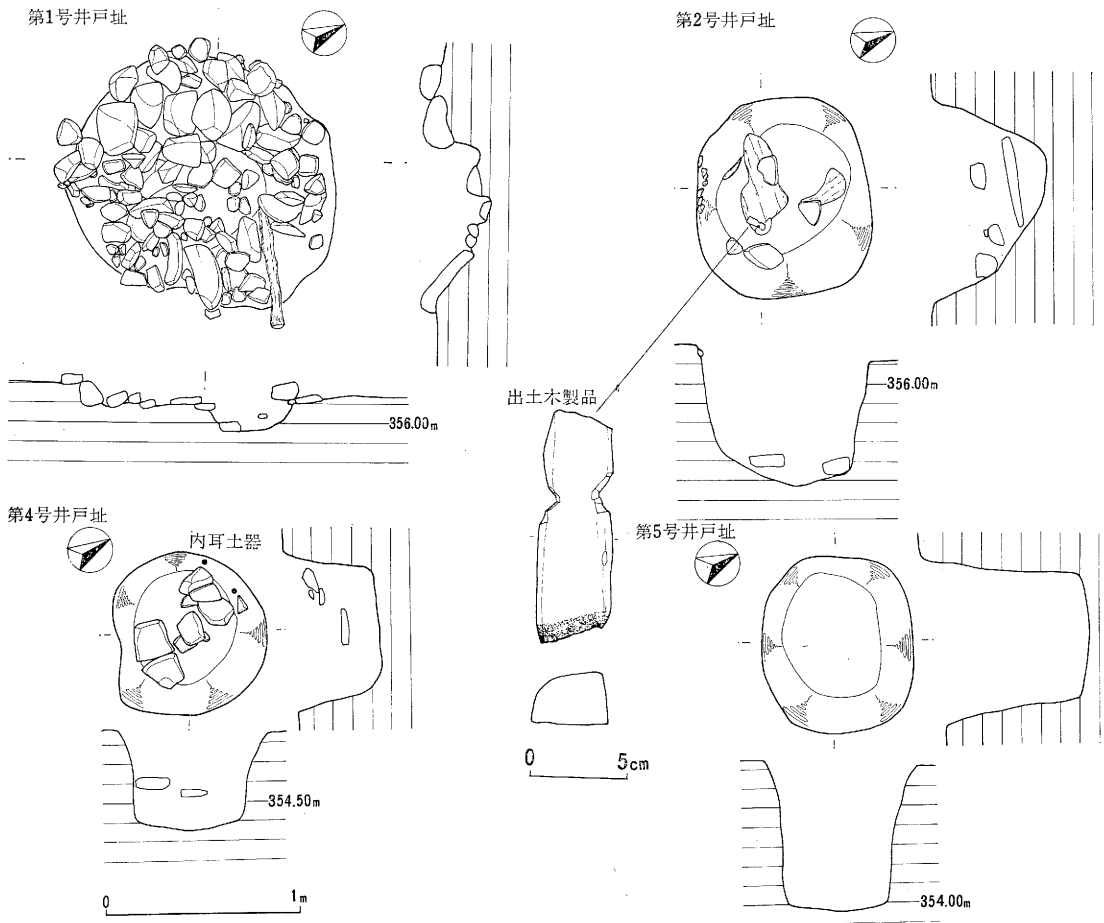
井戸内には、確認面より約30cm下に人頭大の角礫が廃棄されていた。また壁面上部より内耳土器破片が出土している。

第5号井戸址 (写真14, 第5図)

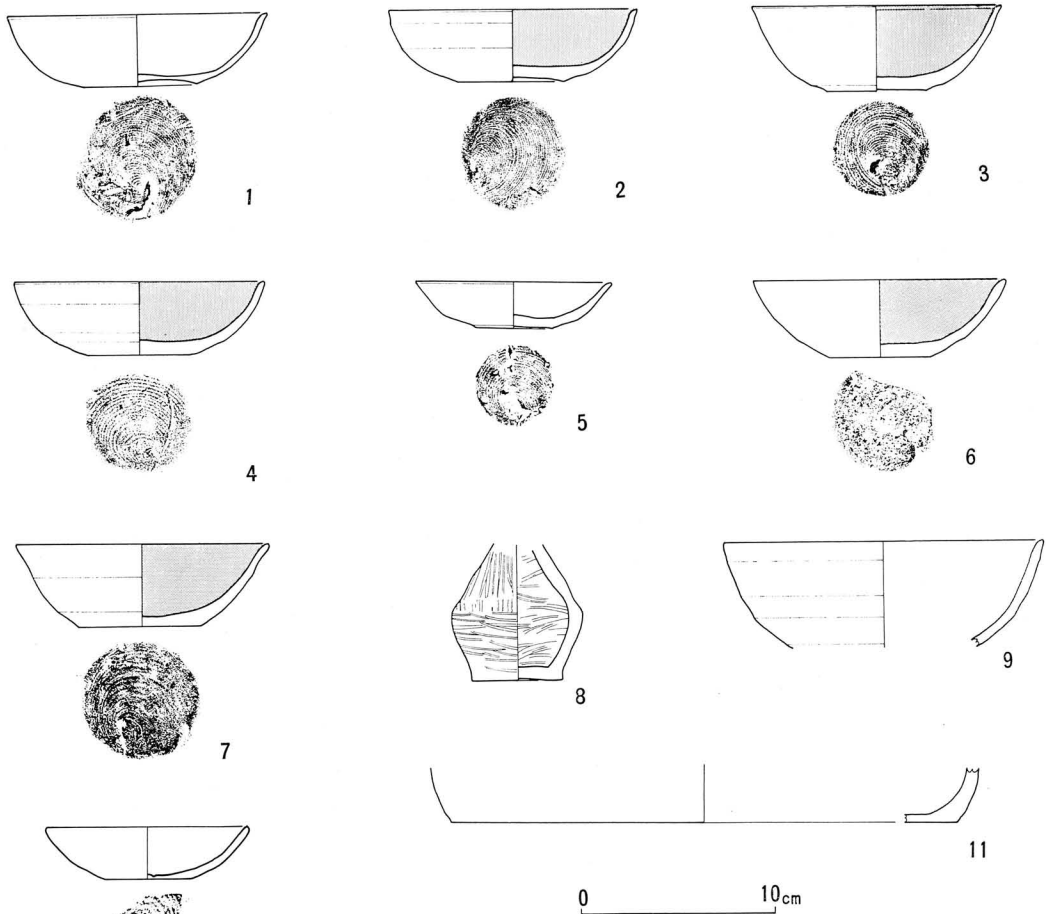
H-11グリットに位置する。90×78cmの楕円形プランを呈し、深さは77cmを測る。壁面は、上部がやや緩く下部は垂直に近い。水が湧出している。

出土遺物はない。

(松沢伸一)



第5図 A地区 井戸址実測図 (1, 2, 4, 5号)



第6図 A地区 遺物実測図

4. 遺物 (第6図)

A地区より出土した主な遺物は平安時代に比定される土師器坏形土器が多い。

1～4は第2号土壙より出土した土師器坏形土器で、すべて完形品である。底部の切り離しは回転糸切り技法により、その後の再調整は施されなく明瞭に糸切り痕をとどめる。口径に比して底径が小さく、器高も3.8～4.5cmである。1の例を除き、他は内面に黒色処理が施される。ミガキは顕著でない。

5は3号土壙出土の土師器坏形土器である。器高2.5cmと浅く、小形である。胎土に狭雑物等含まず、焼成も良好で極めて堅緻である。本例は他の土師器と色調等相異なる。

6は12号土壙出土。全体の $\frac{1}{3}$ が残存するのみである。底部切り離しは回転糸切り技法によるが、その後簡単に再調整（ヘラ削りと思われる）を施したものと思われ、糸切り痕は中央部に若干とどめる程度である。内面に黒色処理を施す。

7は13号土壙出土。壙底面に伏せた状態で出土したものである。2号土壙出土例は内彎ぎみに立ち上るのに対し、本例はやや外彎する。体部にはロクロ痕が残る。内面には黒色処理が施される。

8は14号土壙（仮称＝環状土壙）出土。口唇部が欠ける。弥生時代の小形壺形土器であろう。器表面には縦位、斜位のヘラミガキが施される。14号土壙には他に弥生時代土器細片が出土することから、第20号土壙とともにこの種の（環状）土壙は弥生期の所産と考えるのが妥当かと思われる。

9、10は平安時代に比定される土師器坏形土器で、遺構外出土である。9は底部を欠損するが比較的大きい感じを受ける。10は5と同様な器形をもつが、胎土に小石等含み焼成は悪く軟質な土器である。

11は第4号井戸址出土。内耳土器の底部及び底部周辺である。口縁部分も出土しているが実測し得なかった。

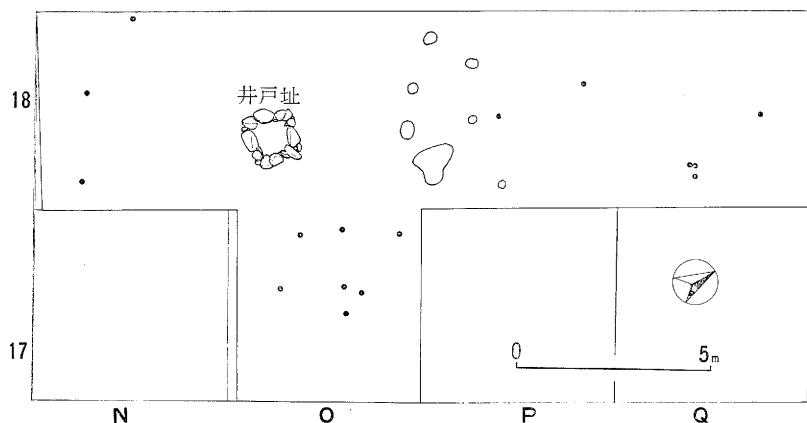
以上、A地区出土土器について述べてきたが、僅か11例のみであった。このうち土師器坏形土器は9例であり、最もまとまっている。土師器坏形土器は、その底部切り離し技法として総て回転糸切り手法を採用している。6の例はその後軽い回転ヘラ削りを施しているが、他の例は明瞭に糸切り痕を残している。法量についても、比較的器高の低い土器が多い。5はその顕著な例である。また、須恵器が全く検出出来なかった点は単に調査区内に於て検出されなかったと考えるより他に理由があるように思われる。

昭和53年度に発掘調査を実施した北原遺跡（高橋 1979, 高橋・望月 1980）の土師器坏形土器は底部にヘラケズリ調整を施す例が主体を占め、回転糸切り痕跡をとどめる須恵器坏形土器がこれに伴う。そしてこの位置を9世紀末～10世紀と推定した。本遺跡A地区出土は北原例より後出的な様相を呈している。

本地区出土土師器は上記のような理由により平安時代中葉～後半に編年しておきたい。

（望月静雄）

V B 地区



第7図 B地区 全体図

1. 概要

A地区北西に位置する。A地区と同様に5×5mのグリッドを12設定した。その内の5グリッドのみを掘り下げた。当初の遺物散布状態からして、ある程度遺構の検出ができ得るのではないかと期待したが、井戸址1、ピット7ヶの検出にとどまった。

井戸址については後述する。ピットについてはピットというよりもピット状遺構とする方が相応しいであろう。年代については伴出遺物がなかったため不明である。

該地区からは、縄文式土器片、弥生式土器片が若干出土している。出土状態もまとまっておらず各所に散在しており、年代的にも相異なることからして流入したものとみなした方がよいと思う。

2. 井戸址 (写真16, 17第8図)

O-18グリッド内で検出した。直径85cm、深さ約1mをはかる。

井戸縁には、あたかも縁りを囲むように40~60cm大の安山岩が配置されていた。さらに、配石の隙間をふさぐかのように粘土によって固定され、全周がマウンド状に盛り上げられていた。壁面は垂直で、A地区の井戸址と比較した場合、きれいな壁面を呈している。小扇状地の扇端面に位置しているためであろうか、壁面全体から水が滲出している。

井戸址上半部には、人頭大から拳大の篠が充満していたが、下半部にはほとんど認められなかった。井戸址底より切傷痕のある木片2点が出土した。どういう用途をもつものか不明である。

(松沢伸一)

井戸址出土木製品について (第8図参照)

井戸址底面より出土した木製品は2点あり、両者ともに加工、切り傷痕をとどめるものである。形状からは具体的な製品名を断定できない。



写真15 B地区全景(南より)

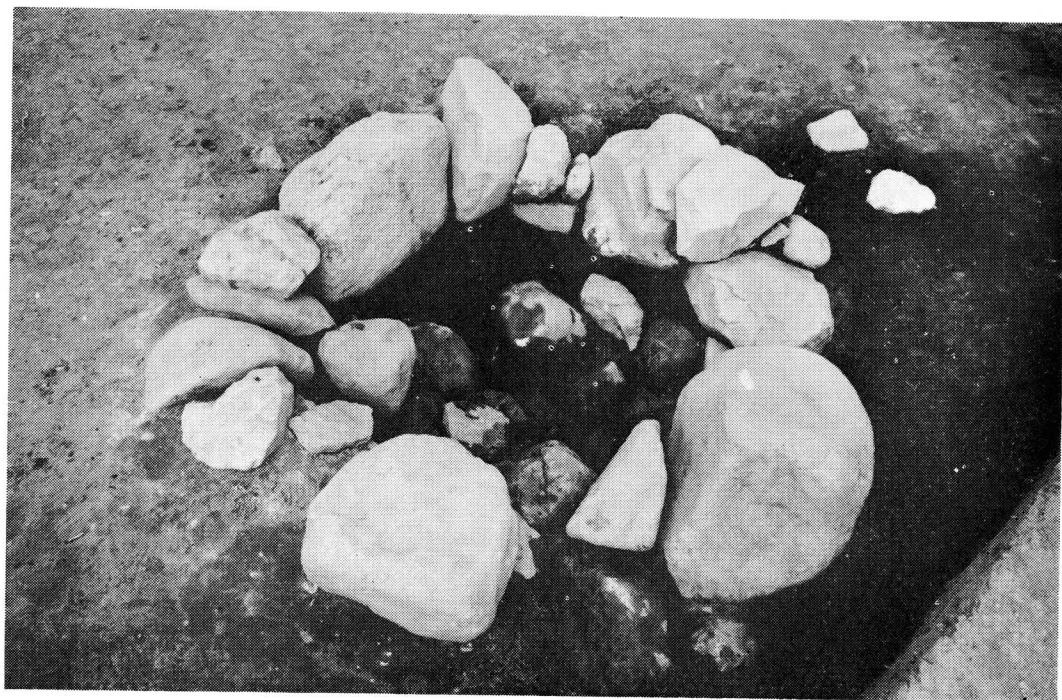
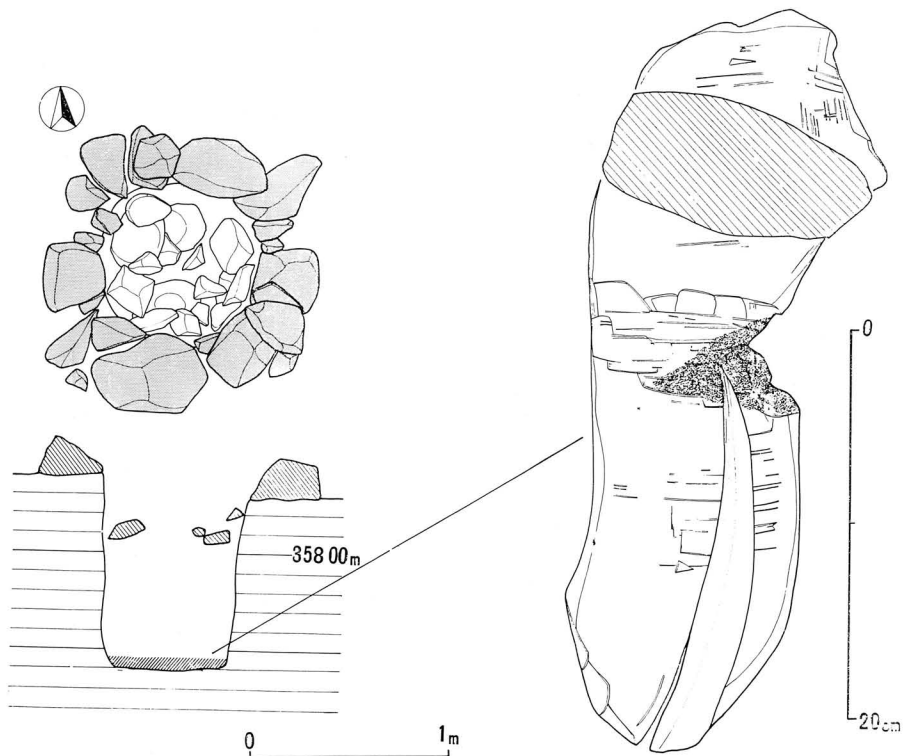


写真16 B地区井戸址



第8図 B地区 井戸址実測図及び出土木製品実測図

図示した例は、両端がやや鈍い刃物で切断されており、中央がナタ状の刃物で真上から切りつけられているものである。また、焼き焦し部分も認められる。

他の例は、木材の根元に近い部分である。樹皮を剥がされているのみで、上、下端は多方向から切り込まれている。製品にできなかった部分と考えるべきであろうか。

(望月静雄)

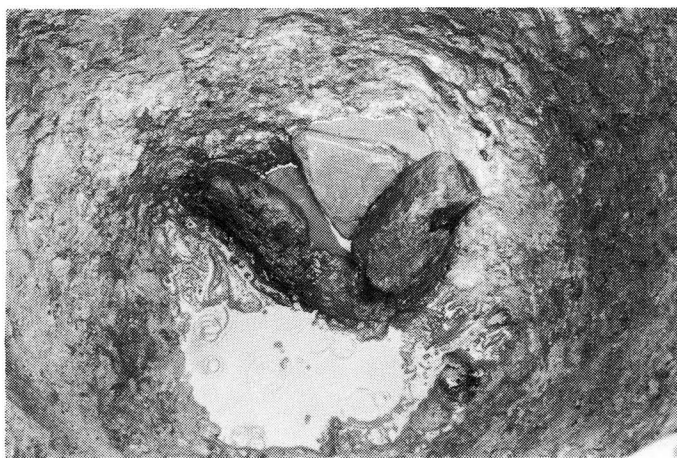
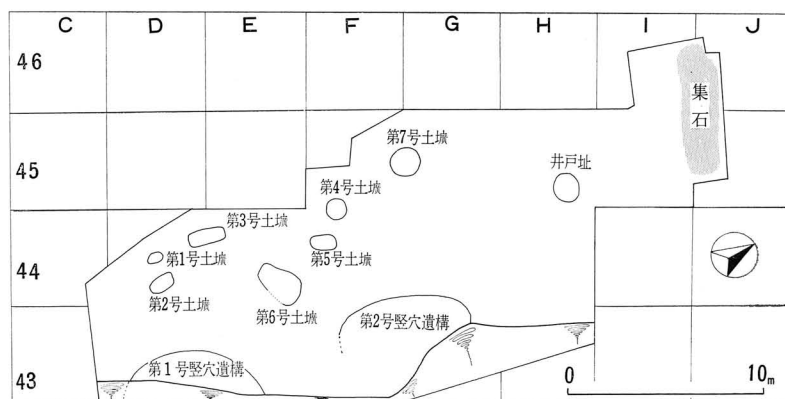


写真17 井戸址内木製品出土状態

Ⅵ C地区・D地区



第9図 C地区全体図

1. 概要

C・D地区は、A、B両地区より比高差約20m高位の地点に位置する。水平距離にしてA地区より約150m西方である。他地区と同様に、周囲は階段状に畑地、水田が広がっており地形の改変が著しい。そのため、さらに拡張して調査することは不可能であった。

C地区において検出された遺構は、竖穴遺構2、土坑7、井戸址1であり、その他人為的に片付けられたと思われる集石が1箇所ある。时期的には、竖穴遺構が弥生時代に比定される。土坑は第3号土坑を除きいまひとつ判然としないが、第3号土坑が平安時代に比定されることから本稿では一応平安時代に含めておき、今後の課題としておきたい。井戸址は内部より青磁破片が出土しており、中世頃と考えられる。集石については時期不明である。

D地区は、C地区の東（下方）15m程の地点にあり、当初C地区に含め遺物集中箇所と称していたが、整理段階で不都合となったためD地区として報告する。本地区は弥生土器が集中的に出土したが、遺構等は検出できなかった。

2. 弥生時代の遺構と遺物

遺構（第10・11図）

弥生時代の遺構として明確なものは竖穴遺構2基である。本遺構は住居址として推定されるが、炉、柱穴等が不明瞭であるので、本稿では竖穴遺構として説明していきたい。

第1号竖穴遺構（第10図）

東南部分が水田構築時の削平により破壊されているために全体の形状をうかがい知ることはできない。残存部から推定すれば、径7m前後の円形乃至楕円形のプランを呈するものであろうか。

周溝は壁下をめくり、かなり幅広い。床面はやや傾斜し、不規則な段差を持つ。柱穴は認められなかった。

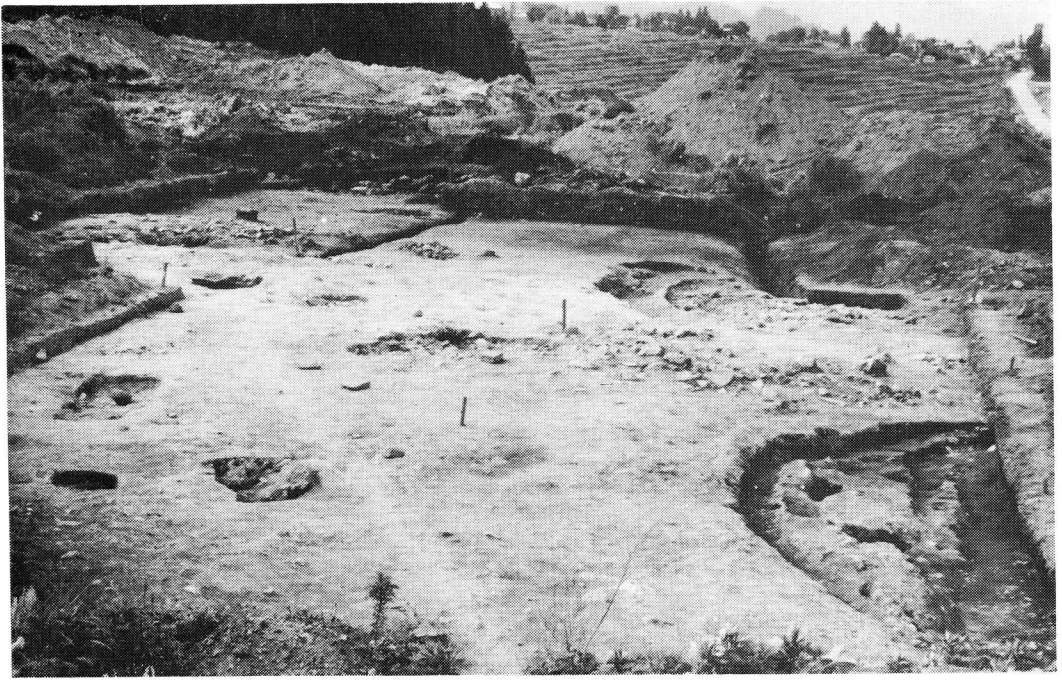


写真18 C 地区 全 景 (南より)

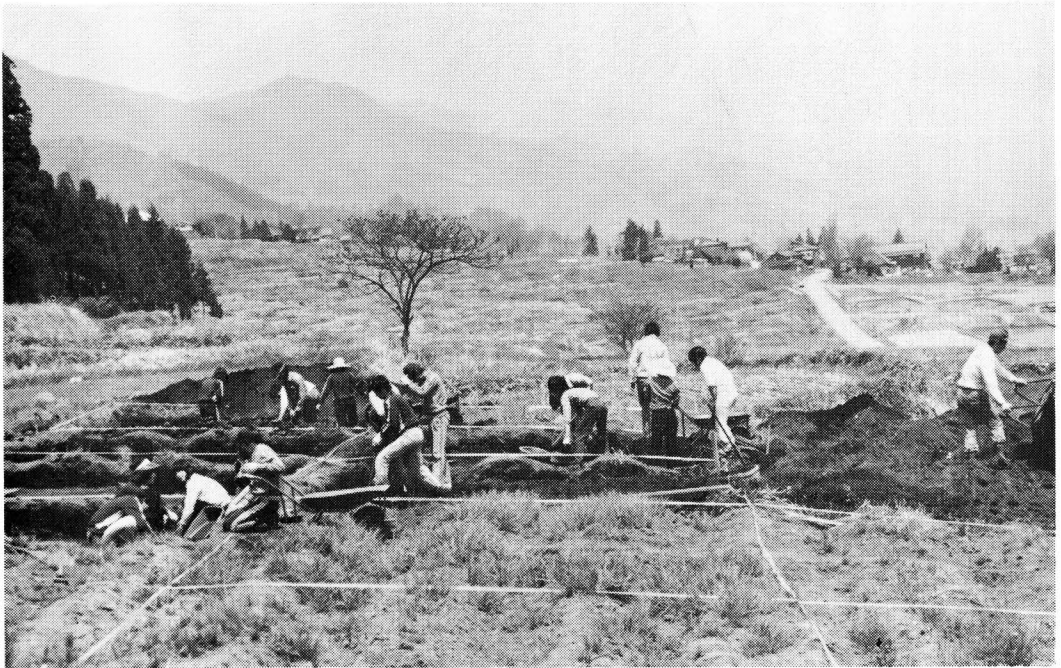


写真19 C 地区 調 査 風 景

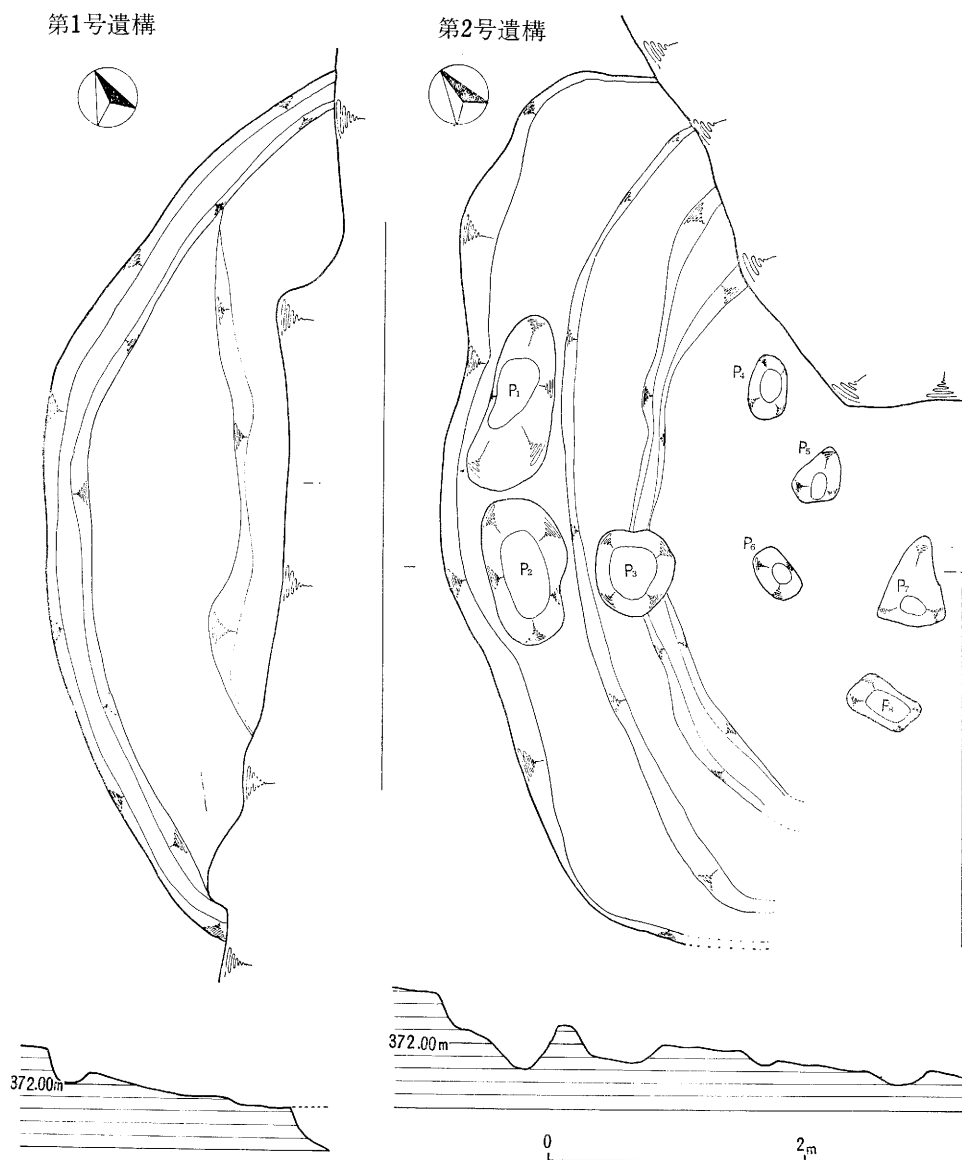
遺物は北側部分に多く出土した。多くは床面に接して出土しているが、小礫とともに纏まった出土状態であり廃棄の様相を呈している。

第2号竖穴遺構 (第10図)

第1号竖穴遺構の北4mに位置する。東南側は1号例と同様に破壊されている。隅丸長方形プランを呈するものであろうか。

床面は二段の構造を持ち、内側に周溝がめぐる。ピットは大小8本認められるが、このうち、 P_1 ~ P_3 はかなり深いが、他は浅く不規則に並ぶ。床面に特別は工夫は施されていない。

遺物はピット内を中心に散在的な出土状態であった。

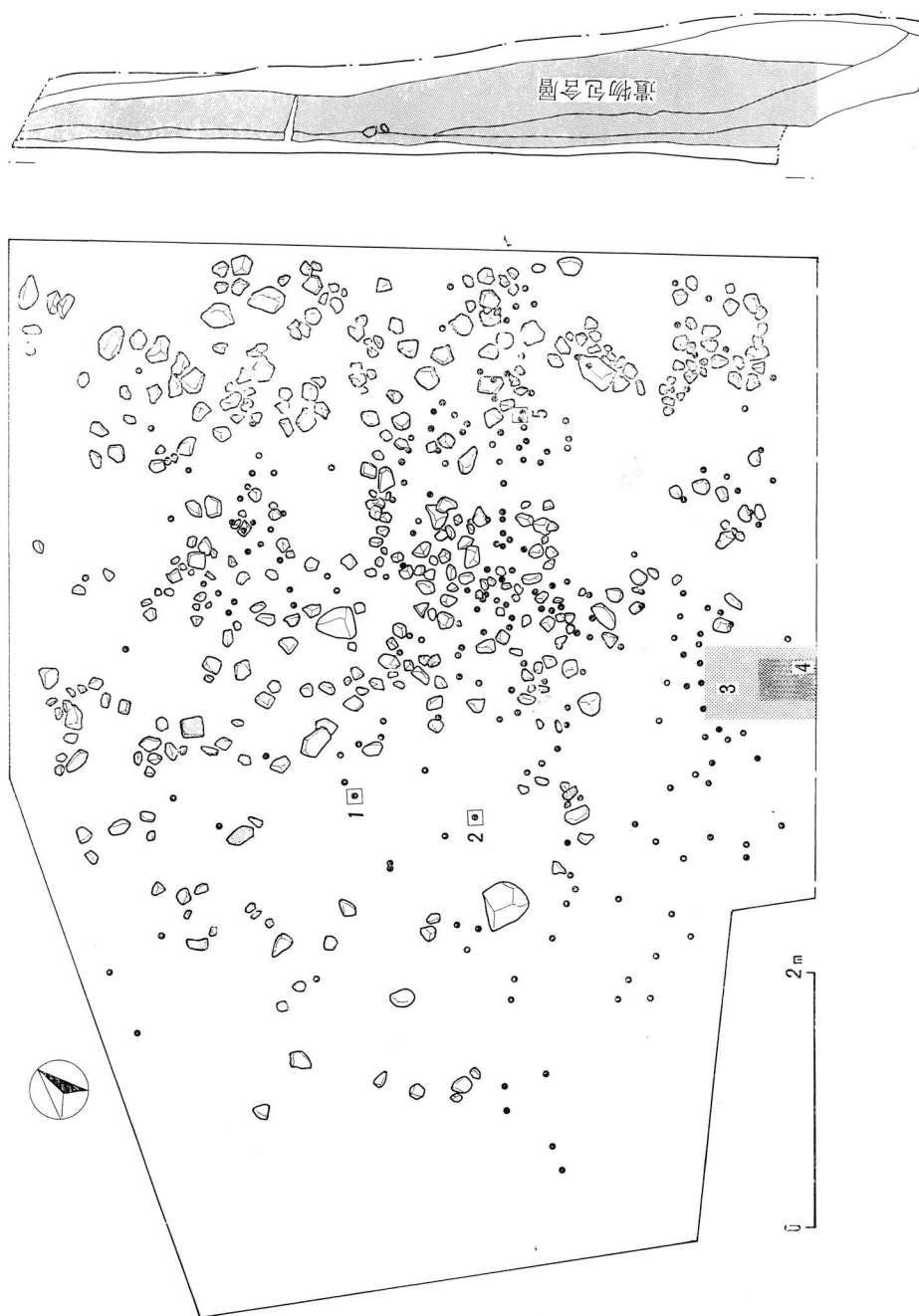


第10図 C地区第1, 2号遺構

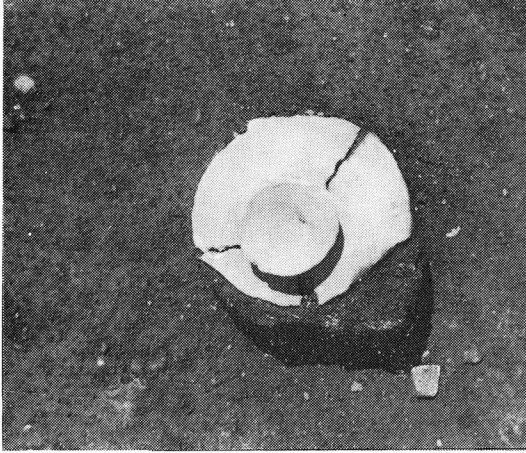
D地区（遺物集中箇所）（第11図）

前述の1・2号竪穴遺構より15m東（下方）の地点より弥生土器が集中的に出土した。1・2号遺構出土土器と若干时期的な相異が認められるため、関連して考えることは難しい。

土器出土状態は、一個体がそのまま潰れた状態を示すもの（写真21）から多くの個体が密集するも



第11図 D地区遺物出土状態



1

写真20

の(写真22)等、個々の出土状態にはバリエーションがある。出土レベルからみると西側の高位面には少なく、傾斜面に至ると徐々に多くなり、東側の凹地状となった部分では最も厚く出土する。土器の磨滅はほとんど認められなく、上方からの流れ込みの可能性はまづ考えられない。

また、多量の小礫とともに明らかに人為的と思われる磨石が出土している(第11図中トーンを施した礫)。中には火熱を受けて赤色化したしたものも認められる。ただ、土器、磨石ともにその出土状態から特別な意図は認められない。

以上の事から、本地区は弥生期における遺物廃棄場所と考えられる。またその時期も比較的短期間に一括廃棄されたと考えるのが妥当かと思われる。

(望月静雄)



2

写真21



3

写真22



4

写真23

写真説明

各写真における番号は、第11図中における番号に一致し、その箇所の写真であることを示す。

写真20 1 蓋形土器出土状態

写真21 2 壺形土器出土状態（南より）

写真22 3 壺形土器等出土状態（北より）

写真23 4 壺形土器等出土状態（南より）

写真24 5 鉢形土器等出土状態（東より）

写真25 D地区遺物出土状態（南より）

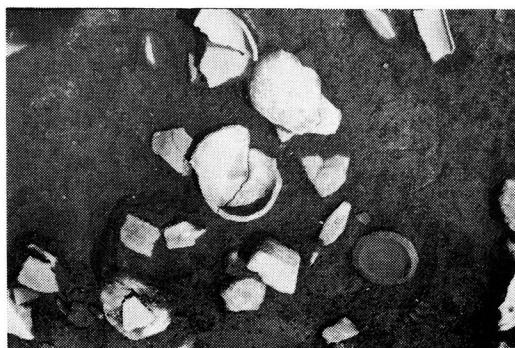
写真26 D地区調査風景（南より）



写真26



写真25



5

写真24

遺 物

弥生時代の遺物は、C地区・1号堅穴遺構・2号堅穴遺構及びD地区から出土している。遺構の項でも触れているが、1号・2号堅穴遺構は隣接しており、D地区の遺物集中箇所はそこから10数m離れた場所にある。D地区遺物集中箇所はそれに伴う遺構は検出できなかったが一括資料として捉えられるかのような出土状態を示している。以下、それぞれの出土遺物について触れていこう。

○ D地区（第12図1～12・第13図1～21・写真27・29）

壺・甕・広口壺・鉢・蓋がある。

壺形土器（第12図1・第13図1～7）

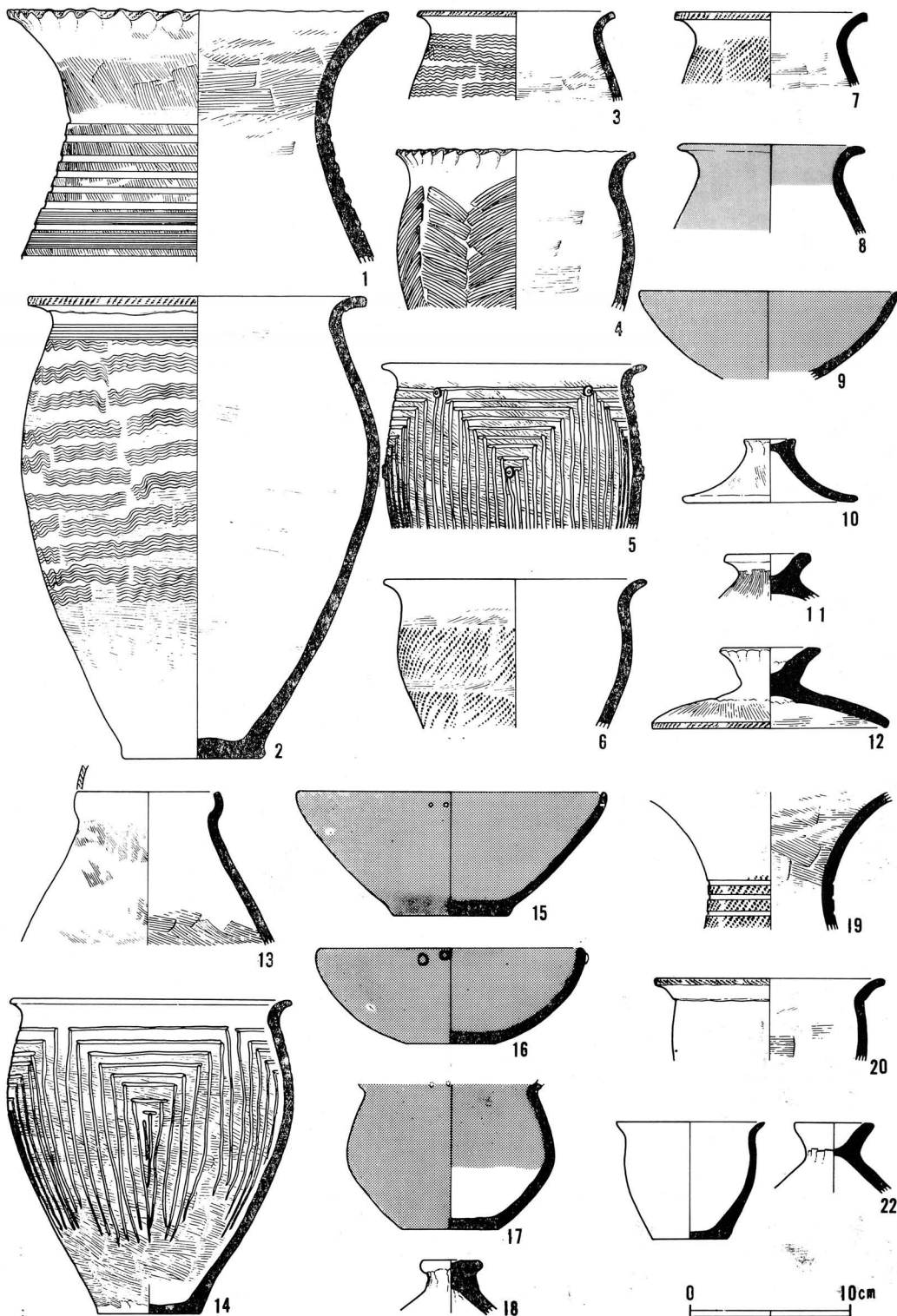
第12図1は大形壺で、外彎する口縁部が付される。口唇部に縄文を施したのち指頭連続圧痕を加え波状を呈す。頸部には若干削りを加えて頸部文様帯を肥厚させている。文様は太い沈線を数条横走させ、下位で沈線間に櫛描直線文を充慎している。沈線間には地に刷毛目痕を残している。第13図1～12は太い沈線文と縄文の組合せである。口唇部には縄文を施し、単純に外彎するもの(1)と翼状(袋状)を呈するもの(5)がある。1は口縁部内面に縄文を施し重山形沈線文を加えている。5は翼状口縁部に縄文と山形沈線文を施している。2～4・6・7は頸部破片である。頸部文様帯は2～数条の沈線間に縄文をとどめ、あとはきれいに磨いている。8のように、沈線間を縄文と櫛状工具先端部の連続刺突文を交互に施文するものもある。9～12は胴部破片で、9は横走沈線文と斜走沈線文、12は横走沈線文と重山形沈線文の組合せである。10、11は胴下半部であるが、10は横走沈線文を、11は大きな重山形沈線文を施している。13は沈線区画の櫛描懸垂文と波状の重山形懸垂文とを組み合わせている。14～16は頸部文様帯が縄文のみのものである。14、15とも外彎する口縁部口唇に縄文を施し、さらに指頭連続押捺を加えている。14は頸部文様帯を削り出して肥厚させている。17は頸部文様に沈線を配するのみで、胴部は丹念に磨いている。

甕形土器（第12図2～7・第13図18～21）

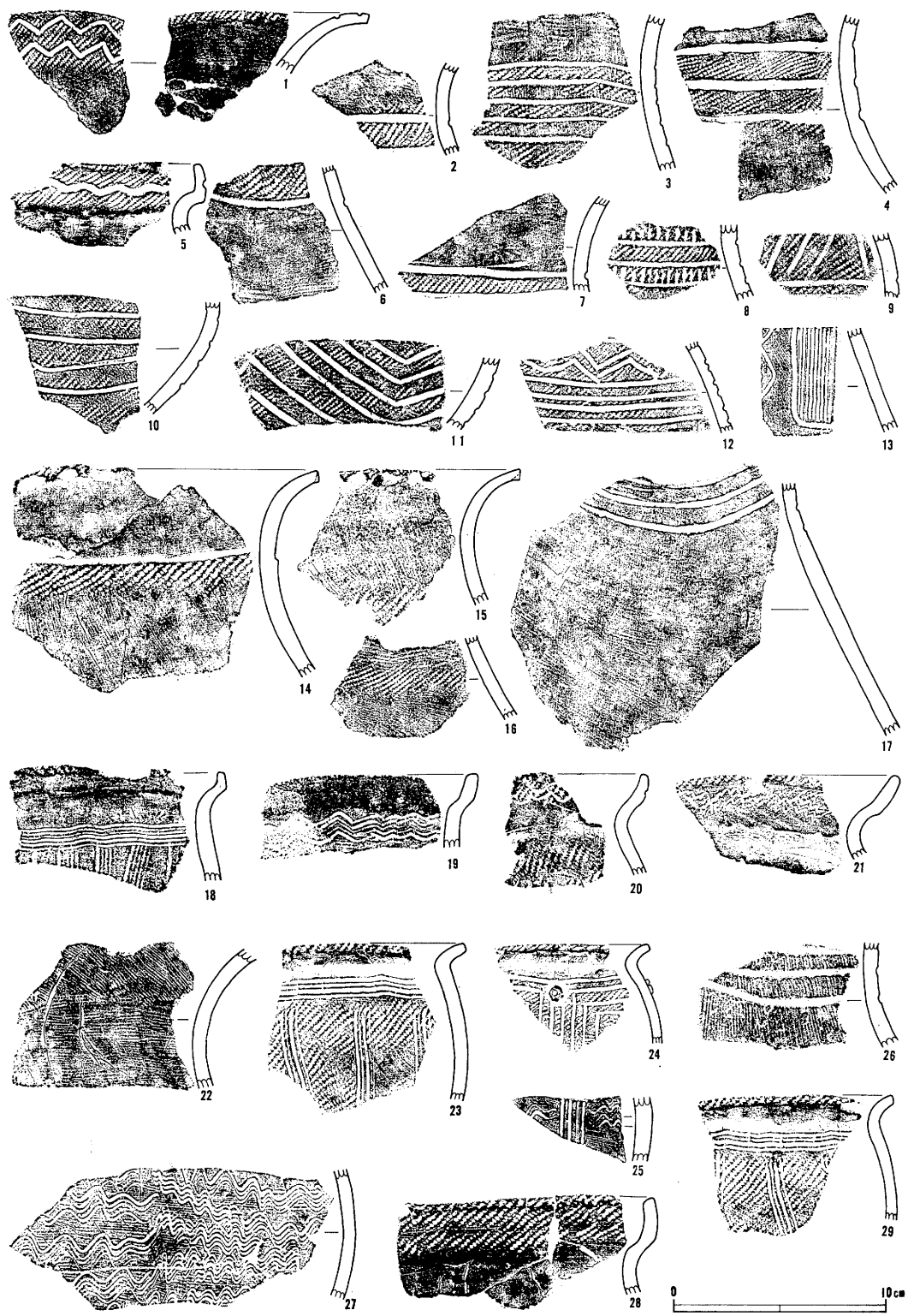
2は大形甕である。最大径を胴上位に置き強く短く外反する口縁部を付す。口縁部下端には輪積み痕を残している。口唇部には縄文を施す。頸部には櫛描直線文、胴部に櫛描波状文を満たし、胴下半部は磨く。地に刷毛目痕を残している。3は2を小形にした甕で、口唇部の縄文、胴部の櫛描波状文は2と共通する。4は櫛描羽状条痕を施す。口唇部に縄文を施し指頭連続押捺を加えることは壺と共通する手法である。5は「コ」の字重ね文を施す。交点にボタン状貼付文を配す。口縁部は強く短く外反するが胴部の張りは前者ほどではない。6、7は胴部に縄文を施している。7は口唇部にも加えている。18～21は口縁部が翼状を呈す。18の翼状部は短く、口唇部に縄文を施す。頸部は櫛描直線文を、胴部には櫛描懸垂文を施文している。19は頸部に動きの重い櫛描波状を施す。20は翼状口縁部・口唇部・胴部に縄文を施し、さらに翼状口縁部に重山形沈線文を加えている。21は口唇部に縄文、翼状口縁部に櫛描波状文を施している。

広口壺形土器（第12図8）

表面と口縁部内面に赤色塗彩を加えている。胴部に張りをもたせ、口縁部は強く外反する。



第12图 C·D地区弥生土器实测图



第13图 C、D地区出土弥生土器拓影

鉢形土器（第12図9）

浅身の鉢で緩く内彎気味に開口する。全面に赤色塗彩を施す。

蓋形土器（第12図10～12）

10は陣笠状に開口する体部に不明瞭なつまみが付す。11は明瞭に作出したつまみ部の破片である。12はほぼ完形品で若干内彎気味に大きく開口する体部に明瞭なつまみが付される。体部中位で輪積み痕を残し、口唇部に縄文を施す。

○ C地区第1号堅穴遺構（第12図19～22・第13図22～25・写真27・28）

壺形土器（第12図19・第13図22）

19は頸部文様が縄文と横走沈線文の組合せ。22も頸部破片。横走する刷毛目と斜走する刷毛目により文様効果を意識している。

甕形土器（2図20・21・第13図23～25）

20は輪積み痕を残し強く外反する口縁部が付される。口唇部には縄文を加える。21は無文の小形品である。最大径は口縁にあり胴部はあまり張らないで底部へ収束する。23は口唇部に縄文を加え、頸部に櫛描簾状文、胴部に縄文地に間隔をおいた櫛描懸垂文を施す。24は小形品である。口唇部に縄文を加える。胴部文様は縄文地の「コ」の字重ね文で交点にボタン状貼付文を付す。台付甕を思わせる。25は櫛描波状文と櫛描懸垂文の組合せである。

蓋形土器（第12図22図）

直線的に開口する体部に明瞭なつまみが付される。

○ C地区第2号堅穴遺構（第12図13～18・第13図26～29・写真28）

壺・甕・鉢・有頸壺・蓋がある。

壺形土器（第12図13・第13図26）

13は内彎する短口縁を付す壺で胴部は無花果形を呈するようである。器面には若干刷毛目痕を残すがきれいに磨かれる。口唇部には縄文を加える。26は太い横走沈線文を数条施し頸部文様帯を構成する。地に刷毛目痕が残る。

甕形土器（第12図14・第13図27～29）

14は「コ」の字重ね文をもつ。地に刷毛目痕を残す。最大径を胴上位に置き、短く外反する口縁部を付す。27は櫛描波状文を満たす。28は翼状口縁帯・口唇部に縄文を施す。29は1号堅穴遺構出土23と同一個体と思われる。

鉢形土器（第12図15・16）

ともに内彎気味に開口し、全面赤色塗彩を施す。15は2孔1対の小孔を穿ち、16は2個1対の貼付文を付す。

有頸壺形土器（第12図17）

扁球形の胴部に内彎気味に立ち上る口縁部を付す。口縁部には2孔1対の小孔を穿つ。器表面及び内面中位まで赤色塗彩している。

蓋形土器（第12図18）

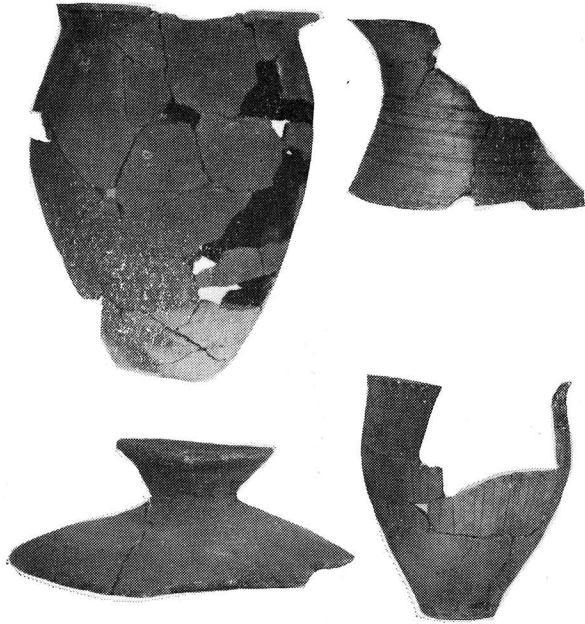


写真27 D地区出土土器(右下のみC地区
第1号竖穴遺構)

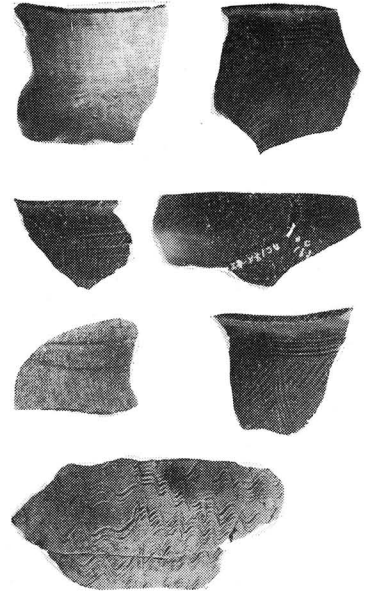


写真28 C地区第1, 2号竖穴遺構出土土器

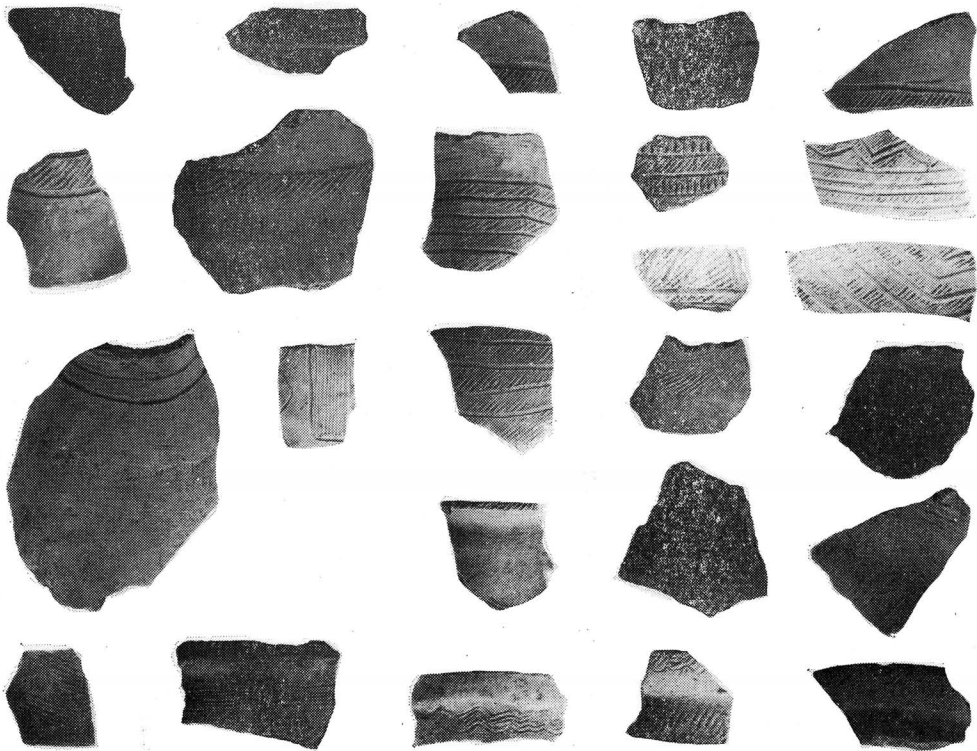


写真29 C, D地区出土土器

つまみ部のえぐりが小さい蓋形土器の破片である。

弥生土器小括

以上、鍛冶田C・D地区出土の弥生土器を説明してきたが、C地区1・2号竪穴遺構出土土器は両遺構間で接合関係が認められる(第12図15の鉢形土器)こと、同一個体の伴出(第13図23・29)があることから同一時期の所産と考えられる。壺形土器の頸部文様帯が画一化あるいは無文化する傾向を示し、さらに刷毛目痕を意識的に残し文様効果をもたせている点などは、有頸赤彩壺の形態が栗林Ⅱ式の無文化した無頸の赤彩壺への移行段階を示すものであろう。これらのことから1・2号竪穴遺構出土土器は中期末の百瀬式に編年してよいであろう。

なお、2号竪穴遺構出土土器13は吉田遺跡出土壺形土器Cの関連性がうかがえる。

D地区(遺物集中箇所)出土土器は、壺形土器は平縁と翼状口縁の2形態を示すが、平縁の場合は外彎の度合がさほど強くない。また両形態とも口唇部には縄文を施し、特に前者の場合は連続指頭押捺を加えている。この手法は栗林Ⅰ式からⅡ式に認められ、第13図1のように口縁内面への施文も同時に盛んに用いられる口縁部施文形態である。なお、第13図14のように頸部に有段部を設けて頸部文様帯を区画する手法は中期末に受け継がれていく手法である。甕形土器で「コ」の字重ね文を施文しているものについては、器形が胴部で張りをもちせておらず胴下半で急速に底部へ収束する形態を示すものと推測できる点で、中期末へ移行する段階の土器であり栗林Ⅱ式に相当しよう。したがってD地区出土の土器は新しい要素と古い要素をもっているが、土器変遷の流れの中で表出する事象であって、一型式内におさまる製作技術であると考えたい。中期後葉栗林Ⅱ式の範疇におさまるものと思われる。

以上の点から鍛冶田遺跡出土弥生土器はD地区遺物集中箇所出土土器を栗林Ⅱ式に、C地区1・2号竪穴遺構出土土器を百瀬式に比定したい。なお、これらの土器様相はかなりスムーズな移行を示すことから短期間で発展移行したものと考えられる。

(太田文雄)

3. 平安時代、中世の遺構と遺物

遺構

平安時代にかかる遺構は7基の土壇が検出されているが、このうち伴出遺物により確実に平安時代に位置づけられるのは第3号土壇のみであって、他は明確でない。したがって、これらの土壇の何基かは弥生時代所産の可能性もある。特に第7土壇例は確認面において弥生土器片が出土しており弥生時代の可能性が大きい。また他の土壇例についても、今後さらに検討を要するので、本稿では確実に時代を決定出来た第3号土壇を中心に述べてみたい。

第3号土壇 (写真30・31, 第14図)

190×70cmの規模で平面長方形プランを呈する。深さは5～20cmである。表土から確認面まで僅か10～15cmであった事を考えれば、以前に削平されたものと思われる。

土壇内の南側部分に土師器坏形土器が5個置かれていた。壇底より約3cmのレベル差をもつ。出土した土師器坏形土器は内面に黒色処理が施されるものと施されないものがあるが、そのうち黒色処理の施されない3個は重ねられて置かれていた。

A地区第2号土壇例と平面ブ



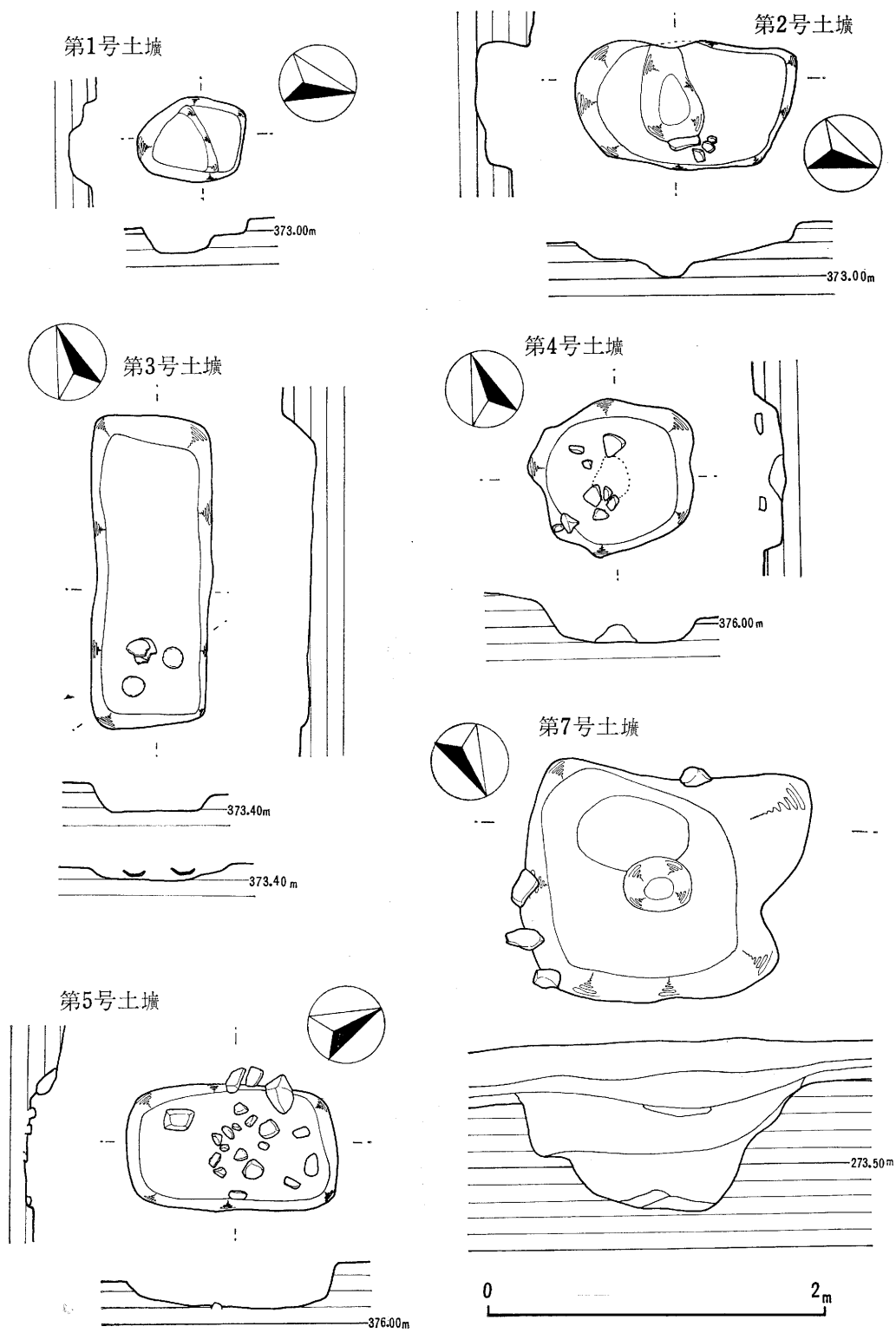
写真30 C地区 第3号土壇 (西より)



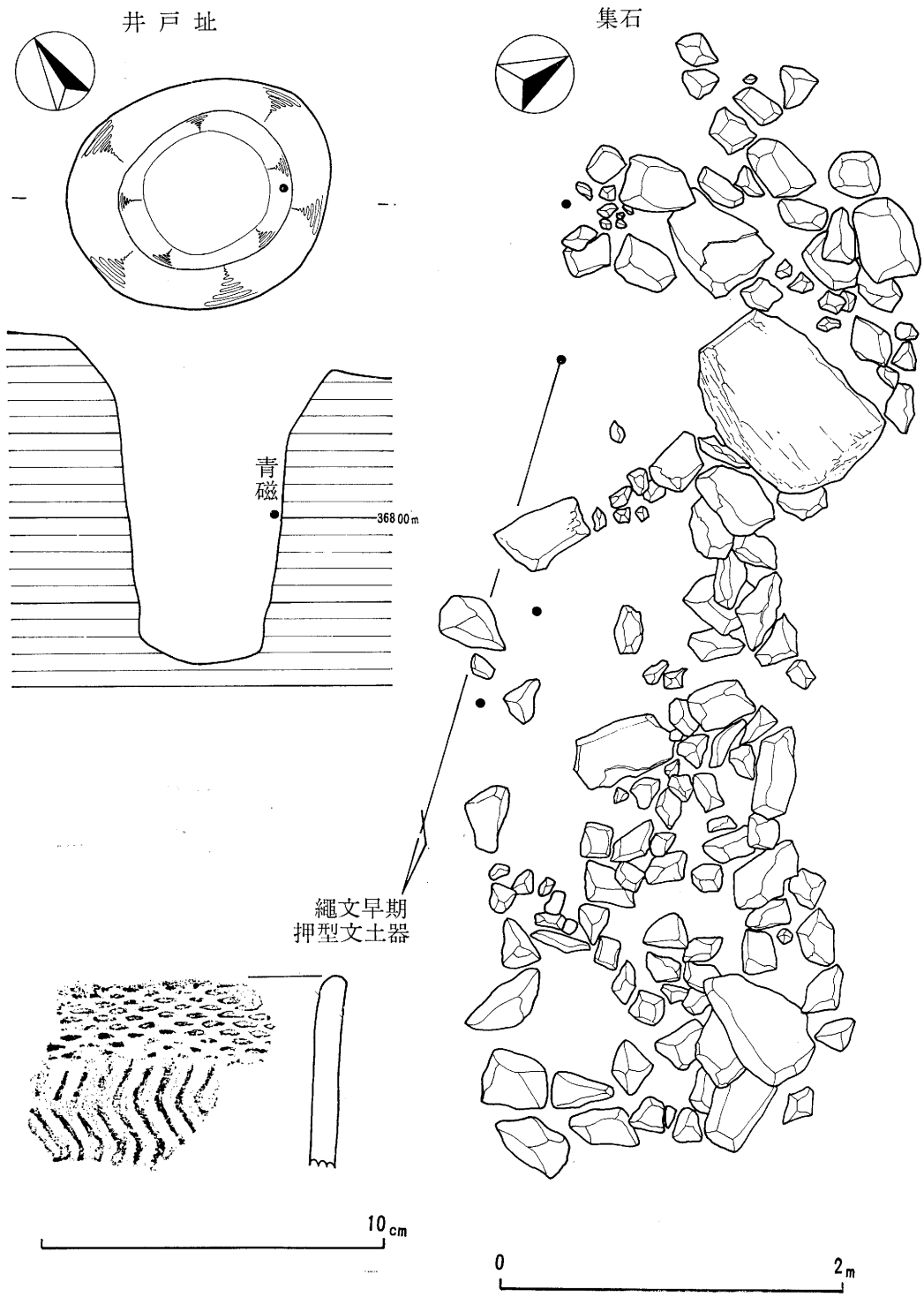
写真31 C地区第3号土壇土師器坏形土器出土状態



写真32 C地区井戸址



第14图 C 地区土壤实测图



第15图 C地区井戸址，集石实测图

ランも類似しており、該期土壙墓の好資料といえよう。

その他の土壙

第3号土壙以外は平面形が不整形を呈するものや深さの浅いものが多い。

第4号土壙は、壙底の中央に約10cmの炭化物が堆積している。第5号土壙の壙底に多くの礫が検出されたが、すべて基盤の扇状地堆積礫であった。(望月静雄)

井戸址 (第15図)

155×135cmの楕円形プランを呈し、深さは200cmを測る。上部は緩やかに掘り込まれるが下部ではかなり急斜な壁面となっている。確認面では人頭大の礫が廃棄されていたが、下半部は暗褐色土が堆積していた。

井戸址内中ほどより青磁破片が出土している。

集石

時期は明らかでないが、650×250cmの範囲内において人為的と思われる集石を検出した。石は安山岩系統の扁平なものが多く、加工痕等認められない。地形的には、北側の谷状地へかかる地点であり、第3層の黄褐色粘土層が急傾斜に落ち込んでいる。したがって、C地区内の遺構構築時に片付けられたと考えてよいと思う。

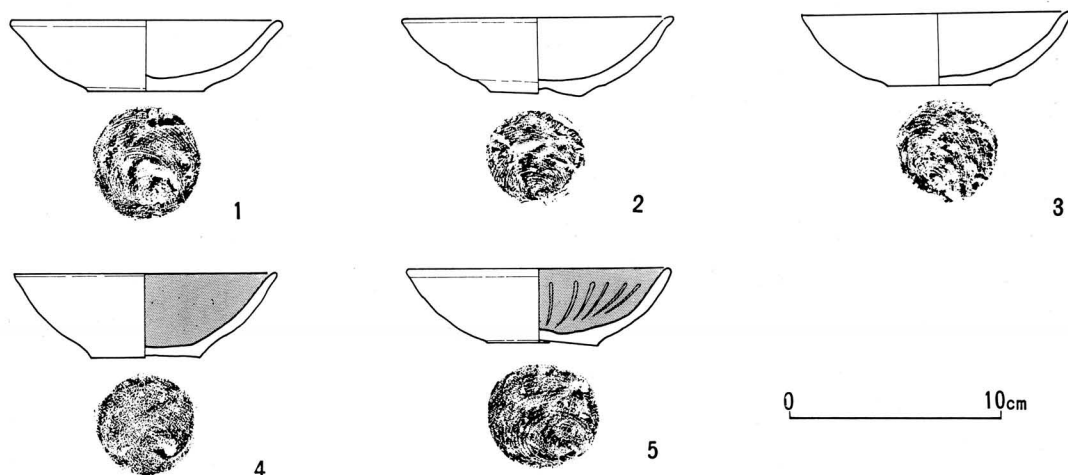
集石に接して、縄文早期押型文土器、弥生土器が散在的に出土している。

(青木由美子)

遺物 (第16図)

平安時代・中世にかかる遺物は、第3号土壙より出土した土師器坏形土器5点のみである。井戸址より青磁破片、および遺構外よりすり鉢破片が出土しているが、小破片のため実測し得なかった。

第3号土壙出土例は、その出土状態が埋置されていたと考えられることから一括資料として差し支えあるまい。1～3は重なって出土したものである。底部の切り離しはすべて回転糸切り技法によるもので、その後の再調整は施されない。概して荒い糸切り手法である。4、5は内面が黒色処理が施



第16図 C地区出土土器 (土師器坏形土器) 実測図

される坏形土器で、1点ずつ置かれて出土したものである。5は特にミガキが顕著に施される。

1～5の法量は、口径12.5～13cm、器高3.5～4cm、底径4.5～5.5cmでほぼ相似する。前記したように、これらの土器は同一時期に使用されていたと考えられよう。

A地区第2号土壙出土例との関係であるが、A地区第2号出土例は法量がやや大きい感じを受ける。しかし、底部切り離し手法・その後の再調整方法等の整形・調整方法が類似しており、大きな時間差を認めることは出来ない。したがって、平安時代中期～後期に位置づけておきたい。

(望月静雄)

VII ま と め

飯山市旭地区の圃場整備事業にともなう緊急発掘調査は、昭和53年の北原遺跡が初めてであった。私達は、この調査で大きな成果を得た。これについてはすでに報告済である。

昭和54年度の整備計画によれば、北原遺跡南方の湿地地帯を中心として約38haが行われる予定になっていた。そして、この計画には関田山脈東麓にも位置する山口部落北方の鍛冶田地籍も当然のことながら含まれていた。この鍛冶田近辺では、過去に地元の人達によって土師器破片や石器類が採集されていた。私達の踏査の折にも若干の土師器破片が得られ、遺跡の存在することが確認された。そこで、土師器破片の散布している畑地を調査地点と定めた。この地点は、関田山脈から流下する小屋の沢によって形成された小扇状地の扇端面にあたっている。そして、前面に広々とした水田地帯がある。この水田は湿地であり、調査地点とは5mほどの比高差をもっている。

調査地点の畑地は、2地区にまたがっているために下方A地区、上方をB地区とした。A、B地点調査中に付近一帯の調査を試みた。その結果、A、B調査地点から120mほど上方、比高差にして20mほどの畑地で弥生式土器破片が出土していることを確認した。そこで急遽この地点も調査の対象とすることに決定し、C地区とした。更にC地区の下方、道路敷の部分でも弥生式土器破片が出土していたため、そこも緊急に調査対象地区とし、D地区とした。

以上のことについてはすでに調査経緯の中に記しているところである。以下それぞれの地区で気付いたことを簡単に触れておこう。

A地区

土壙と井戸址が主体となっている。土壙は全部で20基検出した。土壙の形状は様々で統一性がない。ただいえることは、傾斜面に対して直交するか、斜面に平行して造成されている。これらの土壙の中で、明らかに土壙墓と認定できるのは3基である。他の土壙にも若干の土師器破片を伴っているものもあったが、土壙墓と断定するには、躊躇せざるを得なかった。従ってここでは明確に土壙墓と断定しても間違いのない3基について若干触れておこう。

2号土壙 (写真5・6, 第4図)

傾斜面に沿って造成された土壙である。土壙底面は単に地均しただけである。土壙の北壁に接して段が設けられ、その段上に4点の完形坏形土師器が、口縁を上向きにして理置されていた。その出土

状態は、粘土をもって段を形成し、坏の上面に粘土混合の土をもって覆っていた。明らかに死者への供献として坏が埋置されたものといえよう。他には考えようのない状態の土器である。

3号土壙（写真7，第4図）

斜面に対して直交した状態の土壙である。ここでは土師器坏が1点出土している。

13号土壙（写真8，第4図）

土壙縁辺上面に壙大の礫が置かれていた。土師器坏は土壙の縁辺部で出土した。縁辺部には拳大の礫があり、あたかも礫に挟まれた状態であった。2号土壙の坏の出土状態とは異なり、坏は伏せた状態であった。

長野県内の平安時代土壙墓については、桐原健氏がかつて集成された。この集成の中で桐原氏は「出土土器のうち数多い坑、坏に焦点をあてた場合、須恵器が供膳具の主体を占める時期と、これが消滅して灰釉陶器にその座を譲った時期とに分けられる」としている。桐原氏が集積した22遺跡、75基の土壙中に認められる遺物の出土状態は、報告書に基づいているためか不明瞭な点が多い。ただ、ここでいえることは、土師器のみを供献具とした明確な例はない。このような観点からすれば、本遺跡例は新知見に属するであろう。このことは、時代差なのか地域差なのか今後の問題であろう。桐原氏が集成してから相当の年月が経過している。新資料も増加しているであろう。ただ、筆者は寡聞にして新資料に目を注ぐことができなかった。諸先学の御教示を頂ければ幸いであるし、それを基として奥信濃の平安時代土壙墓の究明を今後とも続けていきたいと思っている。

次に井戸址について触れておきたい。

1号井戸址

確認面で拳大の礫が多く認められた。この地点は地下水面が高く、発掘期間中にも井戸址の部分だけは水の絶えた時はなかった。この点からすれば、拳大の礫は、水浄化のための施設でないかとも考えられるのである。

2号井戸址

底面は地山の礫で造成されている。この井戸址では、下部から木製品が出土した。この木製品の用途については目下の所不明である。他に木製品と同じ位のレベルから炭化物が若干出土している。

3号井戸址

遺物は全く認められなかった。

4号井戸址

内耳土器の破片とみてよいものが、若干出土している。井戸中には少量ではあるが、角礫が認められた。

5号井戸址

遺物は全くみとめられない。単に扇端面を利用し湧水による水を貯えた井戸址である。

以上の井戸址は、大きさ、形状、深さ等からみて非常に共通性がある。従ってほぼ同時期か、少々の年代的ズレをもって構築されたものであろう。そして、その構築年代は、4号井戸址から内耳土器とみなしてよい土器破片が出土していることから考えて、中世の所産として大きな誤りはないと思

う。従って、平安時代後半に造成された土壌と直接的にかかわりあいがないものである。先記したようにA地区の東方は、5 mほどの段差をもって低湿地に連なっている。この低湿地帯に中世のものと考えてよい土器が出土している。この井戸址を構築した人々の集落は、そういう意味では低湿地帯に存在したのではないだろうか。

B地区

A地区の北方20mほど距てた畑地である。縄文前期土器破片、弥生中期土器破片が散在していた。これらの土器はまさに散在というに相応しい状態であった。そして、遺構に伴うものでないことは判然としていた。何等かの要因で流入したものであろう。ピット状の遺構が検出されたが、住居址あるいは建物址遺構を思わせるような状態ではなかった。井戸址が1基検出されたが、これとても井戸底に比較的大形の木片が2点存在したのみで、明確に時代を示す遺物は全く認められなかった。大形の礫を井戸縁辺に並列させていることを考えると、それほど時代のさかのぼるものではなさそうである。A地区の井戸址と同様に中世の所産としてよいと思っている。

C地区

本地区では弥生式時代に属する2基の堅穴遺構址が認められた。この堅穴遺構址は、住居址としてよいと思われるか、破壊の度合がつよいので、ここではあえて住居址としなかった。

この遺構址内からは弥生式中期の土器が出土している。そして、その土器は相互に接合でき得たところから同時期に造成されたものと考えてよいであろう。出土土器の年代的位相は、D地区出土土器よりも1型式新しいものである。いわゆる百瀬式に該当するものであろう。壺形土器中に北信地方弥生式後期初頭に位置するとされる吉田遺跡出土壺形Cへのつながりを示すものが存在することは、該遺構出土土器が、中期末から後期初頭への過渡期の所産であることを示している。

更に弥生式時代の土壌と思われるものが検出されている。判然としたものではないので、ここでは省略しておこう。ただ、確実に判明している平安時代後半期の土壌が1基認められた。3号土壌では土師器坏が5つ置かれていた。その中3枚は重ねておかれていた。坏はいずれも口縁を上面としている。このことはA地区の2号土壌のあり方と共通している面をもっている。いずれにしても平安時代後半期における土壌墓の一端を示す貴重な資料といえそうである。このように土器一特に坏一を重ねて出土した例は、今迄幾例か知られている。たとえば、下水内郡豊田村上今井でも平安時代後期の土師器坏が4～5枚重ねて出土したという。ただこういう例は正式に調査された訳けでなく、偶然の発見によっているため土壌になっていたのかどうか判然としていない。ただ出土例からみると土壌があったとみてさしつかえないのではなからうかと思っている。

D地区

土器破片集中個所である。道路敷の部分である。この地区は、土器溜りともいふべきであろうか。狭い範囲に土器破片が集中して、発見された。その出土状態はまさに一時にわっと投棄したと思わせる状態であった。当初から私達は、この土器の出土状態が、他の遺構等にみられる出土状態とは全く異なっており、投棄したものと推定して調査を進めた。投棄と推定した根拠は、土器破片が累々と層をなし礫が多量に混入していたためである。この推定は、発掘終了後正しいことが証明された。すな

わち、土器出土地点が土器を全く出土しない地点よりも黒色土層が多量に集積し、しかも凹地となしていたからである。土器整理を進める中で、太田文雄が指摘しているように該地区出土土器には、新旧の二要素をもつ二者が存することが判った。それは、壺形土器中に弥生式中期中葉栗林Ⅰ式土器の要素があること、中期末百瀬式土器に結びつく技法をもった壺形、甕形土器が存在することである。しかし、この二者のあり方は、一型式を画するような歴然としたものではなく、一型式内における新旧の要素とみなすべきものと考えたい。この出土土器は、従来いわれている栗林Ⅱ式に相当するものと考えてよいことはすでに触れたとおりである。

桐原健氏が、栗林式土器の再検討を行ない、笹沢浩氏がそれに対して批判を加えて以来、私達は飯山地方の弥生式中期土器の究明を鋭意行ってきた。そして現在、飯山地方に関する限り弥生式中期の編年に対して自信をもつにいたった。私達は、いま飯山地方の中期中葉から後期にかけての編年を次のように組立てている。

小境→鍛冶田D地点→鍛冶田C地点→田草川尻Ⅰ→田草川尻Ⅱ。

この内、小境は栗林Ⅰ式に、鍛冶田D地点は栗林Ⅱ式、鍛冶田C地点は百瀬式、田草川尻Ⅰは後期前葉、田草川尻Ⅱを後期中葉というように想定している。

以上の推移は、断絶なくスムーズにそれぞれ連なっている。このことについては近い将来、資料を提示しつつ明らかにしゆきたいと考えている。

以上鍛冶田遺跡について、所見をのべてきた。いずれにしても鍛冶田遺跡は、旭地区の一大低湿地帯をのぞむ地点に位置し、弥生式中期以降開拓が加えられた。そして、360mの等高線を中心に集落が営まれた。360mの等高線を中心とする地点は小屋の沢がつくり出した小扇状地の扇端面にあたり、初期水農耕には最も適した場所であった。古墳時代～奈良時代には不振であったが、平安時代に入って再び開発が活発化した。そして、その開拓の軸は時代とともに進展し、やがて官牧が設置され、中世社会への移行とともに官牧が次第に荘園化しその中に小豪族が生れるにいたったのであろう。このことについては、昭和53年度の北原遺跡調査に伴ない出土した鍛冶田炉址遺構群や外様平を中心にして展開したといわれる常岩の牧が十分にそれを証明するであろう。

末尾ながら発掘調査に深い理解を示された北信土地改良事務所、圃場整備実行委員会、種々と調査に御協力いただいた山口部落の皆さんに厚く御礼申上げたい。

(高橋 桂)

参 考 文 献

- オ 太田 文雄 1980 「北信濃の弥生後期編年について」信濃第32巻4号
- キ 桐原 健 1963 「栗林式土器の再検討」考古学雑誌第49巻3号
- 桐原 健 1976 「信濃における平安期土壙墓の性格」信濃第28巻1号
- コ 更埴市教育委員会 1969 「生仁」
- サ 笹沢 浩 1970 「箱清水式土器発生に関する一試論」信濃第22巻11号
- 笹沢 浩 1976 「弥生時代」長野県上水内郡誌歴史編

- 笹沢 浩 1977 「入門講座・弥生土器—中部高地1～3」考古学ジャーナル1・3・4月号
 タ 高橋 桂 1962 「飯山市照丘遺跡出土の弥生式遺物について」信濃第14巻11号
 高橋 桂 1966 「北信濃須田ヶ峯弥生式墓塚調査略報」考古学雑誌第52巻3号
 高橋 桂 1970 「柳原の古代文化」柳原村史
 高橋桂・太田文雄 1977 「北信須田ヶ峯遺跡第2次発掘調査報告」信濃第29巻4号
 高橋 桂 1979 「北原遺跡」飯山市教育委員会
 高橋桂・望月静雄 1980 「北原遺跡調査報告書」飯山市教育委員会
 ナ 長野県飯山南高校考古学クラブ 1961 「長野県飯山市有民跡調査概報」信濃13巻2号
 ハ 林 茂樹他 1966 「長野県中野市栗林遺跡第三次調査概報」信濃第18巻4号
 フ 藤沢 宗平 1951 「長野県東筑摩郡寿村百瀬弥生式遺跡調査概報」信濃第3巻4号
 藤森 栄一 1936 「北信栗林の弥生式土器」考古学第7巻7号
 藤森栄一・桐原健他 1956 「海戸，安源寺」
 藤森栄一・桐原健他 1968 「海戸第2次調査報告書」

飯山市旭町遺跡群鍛冶田遺跡調査会組織

- 顧問 小野沢静夫（飯山市長）
〃 井上 慶誠（飯山市公民館柳原分館長）
会長 小林 忠一（飯山市教育委員会教育長 S54. 11. 21退出）
田中清市郎（ 〃 S55. 1. 1 就任）
副会長 柳 公亨（飯山市教育委員会教育次長）
理事 佐藤 政男（飯山市文化財専門委員）
齊藤 二六（ 〃 ）
弓削 春穂（ 〃 ）
高橋 桂（ 〃 ）
上原 幸夫（ 〃 ）
滝沢藤三郎（ 〃 ）
事務局 佐藤 正俊（飯山市教育委員会社会教育係長）
望月 静雄（飯山市教育委員会囑託）

（調査団）

- 団長 高橋 桂（飯山北高等学校教諭）
調査員 松沢 伸一（飯山市秋津）
〃 今井 正文（立正大学文学部史学科卒）
〃 松沢 芳宏（日伸精機（株）長野工場）
〃 青木由美子（長野経済短期大学生）

（指導）

- 関 孝一（長野県教育委員会文化課指導主事）

（作業協力者） 順不同・敬称略

岸田義元（作業員責任者）、鈴木くに子、松沢き美子、岸田しず子、北川則子、岸田とい子、岸田保郎、宮本学、小林つね、北川三枝、岸田保、岸田ユキ子、渡辺すえ、北川平吉、岸田昇、岸田かず江、大塚ふさ子、大塚泰一、岸田みどり、岸田宇徳、北川とみ子、岸田喜久三、岸田ふくえ、宮本こま、岸田よし子、岸田真由美、岸田美春、岸田良子、小林洋

山口区、四ッ谷区、清水一洋

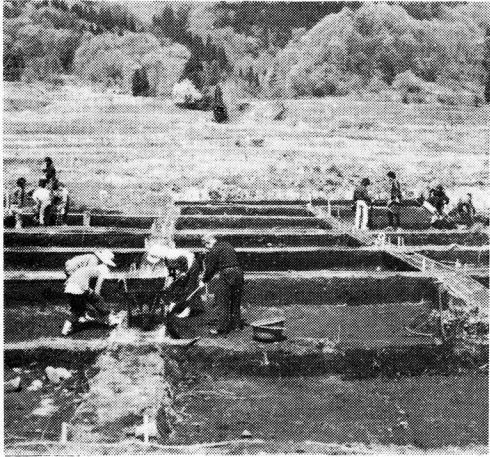
飯山北高等学校地歴部（土屋英夫、黒岩隆）教育委員会事務局 柳公亨（次長）、青木剛、望月富久子、小林芳二、丸山一男、今井吉春、坪井正、吉原けさ子



飯山市江村助役による鋤入式



調査開始



A 地区発掘風景



休憩中のひととき



調査に携わった人達

旭町遺跡群

鍛冶田

昭和55年6月30日

編集 高橋桂・太田文雄・望月静雄

発行 飯山市教育委員会
長野県飯山市大字飯山1110～1

印刷 三和印刷株式会社
長野県長野市川中島1822-1

